

や床屋や菓子屋、鍛冶屋、果物屋、呉服屋、蕎麥屋、魚屋など、種々様々な店屋が市街地を形作つてゐた。そこは釧路の町に接する、かなり大きい村の市街地であつたが、彼はもう、釧路の町に着いたものと思つた。彼は兩側の家々に目がくらむばかりで、何處へ馬車を停めていいのか見當がつかず、きよろきよろしながら、馬車をひいて市街地を通つて行くと、更に廣い道路に出た。すると、もう、すぐ眼前に、驚ろくほど大きい工場が立つてゐて、高い太い煙筒が聳えてゐるのであつた。彼は嬉しくてたまらなかつた。彼は道をゆく一人の年寄の百姓に、

「ここは釧路ですか。」
と、尋ねた。

「これ眞直行けば、ひとりでに釧路の町さ出られる。」

と年寄は答へて、左の方方角を教へてくれた。「ここはまだ釧路の町ではなかつたのか。」と大崎は驚いて、また歩き出した。固い道路の上に鳴る北星の蹄や車輪の音が高く響いて、知らず知らず元氣が出て來るのであつた。再び、廣い泥岸とその中を流れる泥河とに架かつてゐる恐ろしく長い橋を渡るとき、大崎は何んとも言ひやうのない晴れ晴れした氣持で、左方に廣く涯てなくひろがつてゐる曠野と、その上に低く垂れかぶさつてゐる冬の近い雲空とを眺めた。次第に賑やかさの加はる村の市街地の有様を車の上から眺めて、子供たちは、驚ろきと嬉しさと物珍しさで、言葉も出さず目をみはつてゐた。大崎と子供ら二人と北星とは、かうして收穫の身も忘れて巷の中へと到着したのであつた。

大崎は街道で、空車をひかせて來る戻り道の百姓に、近くの安宿を教へて貰ひ、その商人御宿と書いた家の前に馬車を停めた。時間はまだそれほど遅いわけでもないが、既に日の短かくなつた上に冬の近い曇り日で、泥炭地の水や、俄かの雨風でぬれてゐるため、寒さがこたえて來た身體を温めたかつた。宿の亭主に案内されて、馬車から北星をほどいて形ばかりの厩へつなぎ、馬車はそのまま道端へ置いた。亭主は大事なものは家の中へ入れて置くようにと言つたが、大事なものとといふものもなかつた。併し考へてみると、今では何もかにも、大事なもののばかりのやうに思はれ出したので、品物を狭い部屋へ運び入れ、僅かばかりの收穫物は筵に繩をかけて入口の土間へ置かせて貰つた。大崎はそれらの品物を始末しながら、この一切の所有物を明日は金銭に換えねばならぬことを考へてゐた。彼の懐中には、去年、虹別から新しい土地へ移つてからは一錢の出費もなかつたとはいへ、始めから、そう澤山はなかつた。出來るだけ身輕になると共に、金錢は、出來るだけ身に附けて置かねばならぬ氣持であつた。間もなく、日が暮れ、暗い電氣がついたが、その光りは、眼の底が痛い程まぶしかつた。子供たちは、電氣だ、電氣だと言つて手を拍つて喜んだ。大崎は氣はづかしそうな顔をして、そんなに騒ぐんでない、と叱つた。

「今に、小樽さ行けば、夜でも、晝間見たいに明るい電氣ばみられるぞう。」
と言つて聞かせた。宿の亭主が宿帳を持つて入つて來た。宿帳を、と言つて出された時、大崎

は、はつと度肝を突かれたやうに、心の中であわてた。亭主は大崎の顔を見て、無筆ものと思ひ違ひをし、さし出した宿帳と鉛筆とを再びとり上げ、聞き書きする様子をした。

「言つて下されば、わしが代つて書きます。」

と亭主は大崎の返事を待つた。大崎は射すくめられるやうな氣持であつた。彼は住所を何と言つていいかどきまぎした。

「お所はどちらで、」

「：劍路國川上郡虹別原野六十九線北十九號、大崎常造、」

「お歳は、」

「三十六、」

「農業ですな、」

「そうです、」

「お子さんは、」

「秀造、十一、お松、九つです、」

「今日はどちらからお出ででしたか、」

大崎は返事に詰つた。辛ふじて言葉が、かれがれに出た、

「原野から、」

それは大崎自分にも、わけのわからぬ返事であつた。

「虹別原野からですね」

と亭主は別に不審そうにもせず、平氣な顔で鉛筆をなめながら書きつけた。大崎は狐につままれたやうな氣持ちで、ただ「ええ」と答へた。亭主は虹別原野が此處からどれほど遠い處にあるかを知らないのか、或ひは、それに似た名の原野がこの附近にあつて、不審に思はなかつたのかも知れなかつた。

「これから、どちらへお出ですか。」

と亭主が尋ねた。大崎はこれにも返事に窮した。

「小樽さ。」

と大崎は思ひきつて言つた。そうして何故そう言つたかは、自分にわからなかつた。子供たち二人を明日、汽車に乗せて小樽へやることだけは間違いないつもりであるが、併し自分はどうなるのか、全く自分にもわかりやうのないことであつた。彼はそう言つてしまつてから、寧ろ「劍路へ移つて来たので、家を探して、ここへ落ちつくのだ」と言つた方がよかつたやうに思はれたが、亭主がもう書いてしまつた様子なので、そのまま黙つてしまつた。亭主は、宿賃が、朝と晩の食事付きで大人一圓五十錢、子供一圓の規定だと言つて、碌に返事も聞かずに行つてしまつた。それから夕食まで随分、長い間があると思つた。併し本當は、一時間ほどして夕食の膳が運ばれたのであつた。宿の娘らしい十六、七歳位の娘がお給仕に出たが、大崎が氣はづかしくなるほど二人の子供は貪り食べるのであつた。餓ゑきつた餓鬼のやうに、むしやむしやと食べるの

で、大崎自身食べたいのを遠慮したほどであった。

「お父、うまいなあ、米の御飯は。」

「うまくてうまくて、いくらでも食べられるぞ。」

と言ひながら、二人の子供が、がつがつと食べ競ふ様子を前にして大崎は胸がつまり、又たまらなく耻かしくなり、下を向いて、何んとも言ひやうのない、白い米の飯のうまさを黙つて噛みしめてゐるのであつた。子供たちは仲々箸を置かうとしなかつた。

夕食がやうやく済むと、大崎は子供たちを床屋へつれてゆき、自分と秀造との髪をかつて貰ひ、錢湯へ行つた。自分や子供の頭髮は、小屋にゐる間には、時々、裁縫鉄でかつてやるので間に合つたが、熱い湯に入るとは全く夢にも望めないことだつたので、身體も魂も、とろけて行くやうな快感であつた。こすつても、こすつても垢が皮膚からふき出るように、ぼろぼろこぼれ落ちるのであつた。

併し子供たちの様子は大崎の心を暗くした。明るい光のこもつた湯氣の中で、突然多くの人間の間へ連れて來られた子供たちが、人込みのためにおびやかされ、おちけついて、絶えず、きよときよと、としてゐるのであつた。そう思ふ大崎自身も全く子供たちと同様に、おちけてゐて、洗ひ場の隅の方に隠れるやうに坐つて、人々の様子を、絶えず不安げに、また物珍らしそうに眺めまわすのであつた。大崎の心を更に重くしたのは、二人の子供の身體の惨めな状態であつた。裸にしてみて、自分ながら驚き、辱かしくなるほどであつた。妹のおはははひどく瘦せ、腹と胸が

けが膨れたやうに非常に大きかつた。着物を着てゐると、まだ少しはいいが、全裸體にしてみると、既にひどい畸形になつてゐた。そればかりか、低臍兒らしく呆けてゐた。兄の秀造は一層悲惨であつた。いつの間に、かうも曲つて來たのか、背中がひどく飛び出て、肩が一枚の板を負ふたやうに突起して來てゐた。大崎は背中のかたをこすつてやりながら、温まつた時に少しでも直りはしまいかと思ふたか、兩手で肩を抑へて、後の方へ引つ張つてみた。

「お父、なにする、そんなに引つ張ると痛いよ。」

と戲談げに秀造は笑ひながら言つた。大崎は、はつとして手を放した。

のぼせ上るほど温まつて親子三人は宿へ歸つた。子供たちは寢床へ入ると間もなく深い眠りに入つた。併し大崎には、まだ用事が残つてゐた。それは、北星や荷馬車や夜具布團や、その他一切のものを賣拂ふために、宿の亭主に相談することであつた。彼は宿の入口の茶の間に亭主を訪ねた。話は、挨拶代りに凶作のことから始まつた。

「今年は又、去年に輪をかけたやうなひどい凶作だもんで、この邊の百姓の人たちも、ひどい難儀してゐますよ。農家の悪い年はやはり町だつて不景氣で、宿屋もまるで商賣にならんです。農家がいいと、この奥の開墾部落から畑ものが、どんどん出て來るで、そのために百姓の人たちも、泊りがけで出て來て金ば使つて行くでね。併しこの何年この方つてものは、毎年毎年ひどい凶作で開墾部落からは土地を捨てて逃げ出して行く農家が多くてこんなことでは、折角、拓いた土地も草ぼうぼうになつてしまふにきまつてゐますさ。あんたも、開墾部落から出て來た人では

ないかね。」

と亭主は平氣な顔で、ずばりと言つた。そうして大崎の顔色を見て、わしは百も承知だ、と言ふ様子であつた。

「おらたちも開墾には随分骨を折つてみたけど、どうしても作が出来ないんで、毎年、毎年凶作つづきで、この上は餓死するほかないので、思ひきつて出て來ました。草の根を掘つて食ふか、土でも嚼るか、鼠やみみずなら、それも出来るか知れませんが、人間の命は、それでは持つて、開墾地に移つてから、二年のうちにお祖父、お祖母、お母、女房、それに末娘、都合五人を死なしてしまつたで、後にはおらと子供二人残つただけですよ。もう百姓は出來んし、町へ出れば、何んとか食ふだけは稼げると思つて出て來ました。何處かい稼ぎ口はないですか。馬車を持つてゐるで、馬車追ひでもと思ふけど。」

と大崎は最早や宿の泊り客ではなく、口すぎを求める一人の勞働者として亭主の好意にすがる人間になつてゐた。亭主は、釧路の馬車屋も港の不景氣のために仕事が全く無く、馬を飼つて行くのさへ難儀してゐるので、二東三文に馬を賣り飛ばし、その日その日の糧を辛うじて得られる日傭人足になつたりしてゐるが、それも仕事の當るの若い者でも、幾日に一度と云ふ割だと話した。また釧路の附近の炭山も、まるつきり不景氣で、出来るだけ鑛夫を減らし、残つた鑛夫にも出来るだけ石炭を掘り出させないやうにしてゐるのだが、鑛夫は暮しが立たぬので少しでも多く掘り出そうとするので、會社では稼ぐ日數と時間とを減らし、その上、賃銀も減らしてゐるが、

それでも賣れない石炭が山元にも港にも山のやうに積み重なり、その上に草が生えてゐる始末、だから釧路の港には、まるで汽船の影も見えないと物語つた。それに石炭ばかりか、漁業も海産も駄目、木材も海岸に積み腐らすほどで、この市街地の製紙工場だつて、いつ仕事を休むかも知れないし、雜穀、畑ものの悪るいは、あんたも知つての通りだから、景氣と言つたら、開墾地よりも、もつと、もつとひどいのだと語つた。大崎はその話を聞いてゐると、全く自分の生き繼いでゆく隙間などは何處にも見當りそうもなく、お前さんなんかは早く餓ゑ死して行くのが當り前だと言はんばかりであつた。

「そうしたら、おらはどうしたらいいんでせう。」

と思はず、哀訴するやうに大崎は溜め息をついた。

「そうですね、どうするつて、どうにも、かうにも。」

と亭主は途中で言葉を切つてしまつた。大崎は黙つてゐたが、結局、何にかにも賣つて金銭にして、子供は小樽へやり、自分は町をあさり歩いて食ひつなく工面をしなければならぬと思つた。それで、北星と荷馬車、夜具布團に着物、その上、残りの畑ものを賣る相談をかけた。亭主は、大崎の事情と囊中とを早くも察しとつたらしく、今時の景氣の悪い時では幾らにもなるまいが、みんな賣るより他に、しかたがあるまいと大崎の相談に賛成し、寧ろそれをすすめた。そうして明朝、適當の買人を見つけてやると言つた。

大崎は部屋へ戻つて寝ようとする、急に湯ざめを覺え、震へながら冷い寢床の中へ入つた。

遠くから、一分間おき位に規則正しく、ぼうぼうと長く尾を引く太い汽船の音らしいものが彼の耳に入つて来た。それは、釧路の港を閉ざす海霧に對する警戒の霧笛であつたが、大崎には何んの音かわからず、不安の響きをひしひしと傳へる不思議などら聲に思はれた。不氣味な魔物の遠吠えのやうな聲をぢつと聞いてゐるうちに、身體は次第に温まり、深い眠りに陥ちて行つた。

翌朝は向ひ側の家も見えぬほどの霧であつた。朝飯が済むと、亭主は、馬と車とを買つてもよいと云ふ買人をつれて来た。買人と亭主は、大崎に北星を裏の空地へ牽き出させ彼等の前を、ぐるぐると牽き廻させながら、北星の脚腰の様子をじろじろと見据えてゐた。

「骨軟症にやられてゐるな。殊に餌葉をやらんからまるで骨と皮だ。」

買人だと云ふ、北星よりも、大きく見えるほど、でぶでぶに太つて、變に青黒い顔をした五十歳がらみの男が、襦袢に兩手を懐手のまま、ぶつきら棒に言つた。それから、宿の亭主に向つて、

「若狭屋さん、あなたの世話して下さるお客様は、ひどい代物ですな。これでは、つぶしにもなりませんや。大奮發して、馬車共で十五兩つて處ですな。」

と嘲笑するやうに言つた。亭主も大崎も黙つてゐた。

「本當はお斷りせんばならん代物ですがね、折角のお話だから、失禮にならんやうに、値だけは、つけてみますが、もしそれでよかつたらのお話にませう。」

と買人は突つ返すやうに言つた。

「馬車だけでも、どんなに安くたつて三十兩や五十兩どこ位はあるでせう。十五兩だなんてことだと、北星はただにもならんことになります。」

大崎は、北星の手綱をぢつと握つたまま、突立つてゐたが、やうやく口をきつた。彼の口邊と手とは、ぶるぶる震えてゐた。北星は大崎の背後にしよんぼりと佇み、首を地にまで垂れて、枯草の散らかつたのを拾つてゐた。秀造とお松も、いつの間にか裏の空地へ出て来て、その場の様子をぢつと眺めてゐた。

「親方、もう少し、ふんばつて下さい。それでは、この北星があんまり可哀そうだ。」

と大崎は泣き出しそんな鼻聲で言つた。

「馬なんがを、今時、買ふ馬鹿はないのさ。おらは、車なら買つて置いてもと思つて見に来たんだけど、開けば馬も賣り度いと云ふ話なんで、値をつけてみたまでの事よ。賣りたくないなら、無理に賣りなさらん方がいいよ。わしも是非、買ひ度い、賣つて下さいといふんではないから。わしは忙しいで戻るから、もし今、言つた値でよければ若狭屋さんへ言つて下さればいい。眞平、ごめんなさい。」

買人は、冷酷にそう言つて、そのまま、のそのそと行つてしまつた。亭主は少しの間、板ばさみになつたやうな様子であつたが、それは彼のわざとした素振なのであつて、やがて買人の後を追ふて行つた。彼等が見えなくなると、二人の子供は走つて父親の傍へ来た。

「お父、うちの北星、外へやつてしまふの？」

とお松が尋ねた。

「うん、」

と大崎はやうやく、それだけ答へる事が出来た。

「かうして置けば、北星も餓ゑ死してしまふからな。うんと、餌葉を食はせてくれる人さ預けてやるのよ。」

と大崎はつけ加へて言つた。彼は辛くも、そう言つたが、そういふ言葉の後で北星を見る氣はしなかつた。「何を嘘いつてゐる！」と無言の北星にとがめられるやうな氣持ちがするのであつた。大崎は北星を元の既に繋いで宿の入口の方へ行つた。宿の表口の格子窓の前に置かれた車の傍で買人と亭主とは何か話をしてゐた。大崎の來たのを、二人共、横目で見て知つてはゐたが、わざと氣づかぬ振をしてゐるのであつた。大崎は、おじおじと二人の横へ近づいて、

「北星には可哀そうだけど、十五圓で買つて貰ひます。何にせ、おらの立場が弱いのですから」

と哀訴するやうに言つた。すると、買人は、さも、勿體ぶつて、併し忽ちそれに應じた。

「それが賢いですよ。では、十五兩で買ひ極めました。お手を一つ。」

と買人は、懐手をしてゐた兩手を出して、手を拍つた。亭主もそれに調子を合はせた。大崎は何んのことやら、わけがわからずに、手を三つ拍つた。

「それでは、ここで十五兩お渡しします。周旋料は賣人の方からにして下さい。馬と車は、あ

とから若い者をとりによこします。」

と買人はうす黒く汚れた五圓札三枚を大崎の手へ渡して、霧の深い、通りを行つてしまつた。

大崎が紙幣を財布に入れてゐる傍から、宿の亭主は、

「古着屋がもう見えてゐますから、その方も、話をかたづけしてしまひませう。茶の間に待つてゐます。」

と言つた。茶の間で宿の女房相手にお茶を飲んでゐた古着屋と言ふのは、やうやく二十四、五歳位のひどく小柄の男で、黒いズボンにこげ茶色のジャケツを着てゐた。

「へえ、毎度有難う御座います。御不用の御古着、夜具布團を頂きに参りました。」

と馴れ者が馬鹿丁寧にお辭儀した。大崎にはかういふ町の商賣人が、一番苦手であつた。

「お品物は、どちらで御座いませう。なんなら御部屋で拜見いたしませう。」

と言ひながら若者はもう立ち上つた、部屋には荒蕪でくくつた夜具布團がひと山あつた。六疊間の壁側に積み重ねたところを見れば、ひと山ではあるが、これがかつては一家八人の夜具布團だつたのかと思ふと、大崎の目にも今更ながら餘りに貧しい思ひがした。それでも、これらのものこそ、遙かに郷里から携え來り、虹別の開墾以來、敷きなれた夜具布團と思へば、北星に對する氣持ちよりも、もつと切ない氣持ちがした。大崎は蓮を解きながら、次ぎ次ぎに取り出して、これはお母の布團、これはお捨の、これはお祖母の、これはお父の、これはお常やお松や秀造の、それから、これは、おれの布團と胸の中で呼び上げながら、若い古着屋の手へ渡した。それ

から、濕氣を帯び、微くさい、男もの、女もの、ちみなもの、若いもの、一家八人の様々の併しいづれにしても僅かばかりの着類を取り出した。六疊間はそれで取り散らされたとは言へ、數も少なく、品質のよい、目ぼしいものは一點もなかつた。

「これで全部ですか。」

と若者は品物を大體心覺えに整理をして言つた。大崎は黙つてゐたが、これで一切合財なことは一目でわかつた。

「これぢやあ、いくらにもなりませんねえ。そういつては失禮ですが襦袢ばかりですもの。」

と若者は用捨なく言ひ放つた。そうして「一體全體これをいくらで買へつて言ふんです。無代でもいやですなあ」とでも言ひたそうな顔をして、大崎の顔を見た。

「お父、おらの着物も、やつてしまふのか。」

とお松が泣き出しそうな聲で言つた。

「やるんだけど、後でもつといいのを買つてやるからな。新しいのを買つてやるから。」

と大崎はなだめた。

八人分の夜具と着類だが、若者のつけたその値段は北星と車とよりも惨めなものであつた。若者は、全部で十二圓と言ふのであつた。大崎は、あつけにとられてしまった。

「考へて御覽なさい。この夜具布團は、皮は剥いで襦袢にするしか使ひ道がありませんよ。まあ、古綿だけの値段です。それに、着類の方は、今時の人は、農家だつて、こんな金遣出して

買ふ人はありません。デパートへ行けばきれいで安いのが、うんと、ぶら下つてゐますからね。これも、みんな、襦袢にしに向きませんよ。」

若者は思ひきり、ぼろくそに言つてから、少し賣人の氣を引き立てやうとする様子で、

「もう少し何かありませんか。これでは買人としたつて値のはりこみやうがないんですよ。奥さんのお羽織か何かありませんか。」

と言つた。

「そんなもの、あるもんでない。開墾地さはいるので、そんなもんは、みんないらなと言つて、郷里を出るときに賣り拂つて來たんだもの。これしか、ほかに何んにもないのが當り前ですか。」

と大崎は思はず恨むやうに言つた。

「それあ本當ですね。北海道の開拓に來られた農家が贅澤は出來ない筈ですね。でも、この近所の農家では、凶作だ、凶作だと云ひながら、デパートで着物は買ひ、お白粉はつけるし、ビールや酒や焼酎は飲むし、自轉車で映畫を見に出て來るし、白首買ひにまでやつて來ますよ。よくあれで續くもんだと思ひますね。町の者だつて、あは遊び廻りませんよ。まるで凶作に、なれつこになつてしまつて、凶作も貧乏も苦にならないんでせうね。町や村の役人たちの方が凶作の救済でかけずり廻つてゐるやうなもんです。そこへ行くと、農家は得ですね。凶作だとなると、お役所で放つて置きませんが、わたしたち商人となると、どんな不景氣が來ようと、誰も嘆

も、ひつかけてくれませんか。ところで、如何でせう。お品物は、さつきのお値段でお願いしてようございませうか。」

若者はべらべらと自分勝手に、しやべり立てた。そうして大崎が不承知なら、そのまま立ち歸らうとする素振りを見せた。大崎は黙つて、うなづいた。若者は財布から、十二圓を疊の上へ並べて大崎へさし出した。そうして傍に持つて來てゐた、紺の八反風呂敷を展げて、布圍と着類をそれぞれ二つの包みに拵へた。その物なれた振舞ひに、おちけた視線を投げてゐる大崎の目前で、若者は自分の身體より大きい包みを茶の間へ持ち運んで行つた。そうして、最後に空手で戻つて來て、「どうも有難うございました。又よろしく願ひ致します」と言つてへなへなした襖をしめて立ち去つた後に、がらんとした湯つぼい部屋が、大崎と二人の子供とを呑んでしまひるうに、だだつ廣く思はれた。大崎は夜具布圍、着類の代價十二圓を財布に入れて、ぼんやりしてゐると、宿の亭主が襖を開けて隣の茶の間から入いつて來た。

「古着も随分、安い世の中になりましたね。あれだけで、十二圓とは驚きました。ところで、きのふのお話では、お賣りになる畑のものがあるようですが、商人に賣ると、どうせ高いことは言ひませんから、お宿をしたのをご縁に、わたしに賣つてもらひませうか。」

と親切ごかしに言つた。併し大崎は、最早や、蛇ににらまれた小雀のやうに、どうにもならなかつた。自分の考へなんか、あるのか、無いのか自分でわからない氣持ちであつた。ただ一刻も早く、賣るものは一切合財、賣り拂つて、金銭に換えて、此處を立ち去り度い一念であつた。大

崎は入口の土間で亭主と一緒に俵や吠に入れられた畑ものを調べた。種類から云へば様々のものがあつた。馬鈴薯、蕎麥、大豆、小豆、唐黍、小麥、燕麥、南瓜、なぞ出て來た。併しそれは、いづれも、ほんの少しばかりで、まとまつた量はなかつた。大崎は、あの新しい土地が彼の勞力に酬ゐた貧しい報酬の、その又一部に過ぎない作物を足下に眺めて、蕊から情けないと思つた。小屋でみた折には、これらの收穫物はまだ幾らか心に安心を與へたのだが、今、かうして取り集めてみると、それは自分ながらあきれ返るほど僅かなものであつた。

「色々のものがありますが、どれも、これも、ほんのちよつぴりで、まあ家で食べるだけですなあ。全部で三圓で頂いて置ませう。」

と亭主は大崎なぞに目もくれず、獨りぎめに言つた。それは、何んぼ、何んでも餘り安すぎると思つたが、大崎の言葉を出さぬうちに亭主がたみかけて言つた。

「三圓で頂きますが、さつきの馬車の口錢と差し引き勘定にして頂きますから。」

大崎は最早や、不服を言ひ立てる氣力もなかつた。早く此處を立ち去らうと思ふが、去り際にまたどんな目に逢はされるか、氣味が悪くてたまらなかつた。彼は部屋へ戻ると、子供たちを、せき立てて出立の仕度をした。彼は、ちよつと、北星を見て別れたいと云ふ氣もしたが、それよりも亭主に對する怖れが、彼を追ひたてるのであつた。彼は茶の間で大人一人、子供二人の一泊の勘定として三圓五十錢を財布から出すと、受取も取らずに、そそくさと宿を立ち去つた。濃霧のまだ漂ふてゐる市街地の街道を、追はれるやうにすたすたと歩いた。子供たちは、走りながら

ついて来た。彼は一切のものを賣り拂つたといふよりは、一切のものを掠め奪られてしまつて、魔の口を通れるやうに街道を急ぎ釧路の町へと向つた。街道は次第に賑やかになり、いつの間にか彼は町へ入つてゐた。

大崎は歩き歩き人に尋ねて、釧路の停車場へ向つた。驛の前の廣場へひよつこり出ると、幾年か前に始めて移住して来た時、移住團體の仲間の者と一緒にこの廣場へ出て、林檎やふかし芋や、茹でた大きい海蟹を買つて食べたのを思ひ出した。あの時は團體で連れが多かつたので、まるで遊山にでも出かけたやうで、みんな浮き浮きとして元氣だつたが、と思ひ浮べた。幾年ぶりかで、舊知の場所へ戻つて来ただけで、彼の氣持はほつとした。彼は驛へ入いつて行つて、驛員に小樽へ行く汽車の時間を尋ねた。夜の七時のに乗ると、翌朝の九時に小樽に着くこと、これが途中乗換がなくて、一番便利なことを知つた。

「それで汽車賃は、なんぼかかるでせう。」

「大人が四圓九十五錢、子供がその半額です。」

驛員は大崎の傍から離れぬ子供たちを見て、そう言ひ、向ふへ行つてしまつた。大崎は驛員の背後から、

「有難うございます。」

と言つた。大崎は子供と並んで、ベンチに腰をかけた。そうして、胸算をはじめた。「子供二人、汽車賃がさつと五圓、便當二つ持たせて七十錢位か。六圓あれば、小樽へ送つてやられ

る。彼は何故、小樽と云ふ氣になつたかは、自分でも本當はわからなかつた。どうして縁も、ゆかりもない小樽と云ふ土地が胸に浮んだか不思議であつたが、彼には、かういふ記憶が頭の隅に残つてゐたのであつた。それは幾年前の移住の時に、北海道の汽車の中で、遠く奥地へ土工稼ぎに行く人夫たちが話してゐるのを聞いたことであつた。北海道で稼いで、困つたら何處からでも小樽までの汽車賃さえあれば心配はない。何か、かにか稼ぎ口はあるし、病氣で倒れば、無料で治療してくれる病院もある。だから土工の親方だつて、いよいよ働かなくなつた人夫には、小樽までの切符を買つてやつて、厄のがれをするのだ。といふやうな話であつた。大崎は、子供ばかりか、自分も一緒に行けば本當はいいのかも知れぬと思つたが、どうしたものか、この態のいい、謀のある捨子に、自分で何んの疑ふ氣持がしなかつた。彼はただ苦しみを逃れたい一心で、是非の判断なぞ到底思ひもよらぬふうであつた。併し驛のベンチでぢつと腰かけてゐるのは、次第に彼に不安の氣持を搔げさせて来るので、夜の七時まで何處でもいいから、ぶらついて時間を過さねばならぬと思つた。彼は驛前の廣場から三本出てゐる道路のうち、一番賑やかな真中の廣い道路をぶらぶら歩き出した。子供は通りすぎる店屋の賑やかさと綺麗さにすつかり有頂天になつて喜んだ。大崎は時々、自分の姿が、シヨウウインドウに映るのを見て、町へ買ひ物がてら子供を遊ばせに出てゐる近郊の農夫のやうに見えると思つた。廣い道路をかなり行くと、廣い、大きな長い石橋があり、その突きあたりは大きい建物の立ち並んだ高い丘、右手は河口で港に續いてゐた。左手は次第に低くなる丘の裾をめぐつて、あの自分の知つてゐる曠野へつ

づいてゐるのであらう、濁つた河がその方角から、靜かに流れて來てゐた。この大きい、綺麗な橋の上の眺めは、子供たちばかりか、おとなの大崎にも、楽しい、いつまで見てゐても、あきないものであつた。殊に、橋の上から見下ろした右下の河岸には、魚市場があり、澤山の發動機船が岸に繋がれてゐて、岸で漁夫が釣繩を調べながら巻いてゐたり、船から、大きい魚が市場へ上げられたり、更にそこから運び出されたり、猫のやうな鳴き聲の灰白色の海鳥が河の水の上や、橋の欄杆間近く、行き來する人々の頭にすれすれに飛んで來たりした。それから、時々、橋の上を勢よく馳けて行く、バスや自動車が子供たちを驚かした。子供たちは、何もかにもが珍らしく、楽しく、あつげにとられて眺めてゐた。大崎は本當に久しぶりで次第に氣持ちが、伸び伸びとして來るのを感じた。殊に胸算で、今、現實に懷中にある、虹別以來の、かれこれ、八、九十圓の金貨は、何かしら永遠に彼の生命を護ることを保證してくれてゐるやうに思はれて力づよかつた。彼には、この金のある内に、きつと何んとかなると云ふ氣持がするのであつた。

子供たちは、昨夜と今朝との宿の食事で、常住の空腹が一時に刺戟を受けて、虹別や、小屋にゐた時よりも、一層ひどい空腹を感じる様子であつた。晝時にはまだ早いやうであるが、餘りせがまれるので、いつものやうに叱りつけはせず、橋の袂にある屋臺店で、壽しを立ち食ひさせた。子供らは、黙りこくり、咽喉を鳴らしながら、むしやくしや食べるのに、つひに大崎もあきれてしまつた。

「もう、やめて置け。また晩に食はせるから。」

と大崎は子供らをなだめた。子供らは、まだ食ひたそんな顔をしてゐた。この小さい安壽し屋で三人で、二回變らの壽しを食べた。外へ出ると、

「あの、赤い魚の壽し、うまかつたなあ。」

と秀造が、感極まつたやうに言つた。

「鮎のか。」

と大崎も、賛成らしく答へた。近海で鮎の澤山とれる此の土地では、それは珍らしいものではなかつた。併し三人には何んといふ、うまさであつたらう。大崎も心の中で、うまかつた、うまかつたと繰り返してゐた。満腹になつた親子三人は、また橋の欄杆から、河や海や船や海鳥や丘や澤山の人々や自動車を、あきることなく、眺め楽しんでゐた。汽笛や、海鳥の啼き聲や、自動車の響きの外に、賑やかな蓄音機の音が心をそるやうに面白く聞えて來た。ああ、何んといふ、面白い唱歌だらう。何んといふ綺麗な聲だらう。何んといふ奇妙な節だらう。子供らは、ここにこしたり、不思議そうな目をしてたり、面白くて、とろけるやうな顔をして聴き入つてゐた。大崎にも、或る女聲が甘たるく舌にもつれる調子で、身内にくすぐつたい感じを流し込んだ。彼はふと、久しぶりに、全く久しぶりに情慾的なものの動くのを強く感じた。彼は甘い、こげつくやうなものを胸落ちの底にじりじりと感じた。

大崎はその蓄音機の聲から遁れるやうに、子供を誘つて、橋の突き當りの高い丘へ登つてみた。大きい役所の建物や、澤山の家が、丘の上に連つてゐた。そうして丘はいくつもの起伏で連

り、思はぬ處に谷があつたりした。沼があつたり、その沼の畔に炭山があつたり、それから、幾つもの丘の重なつた向ふに、遠く廣々とした曠野があつた。彼には、すぐ、その曠野が自分の知つてゐる、自分の見捨てた、自分の通つて来た曠野であると思つた。それから、廣い市街の屋根の遙か向ふにまで海が廣がり、昨日自分が見たと思はれる工場が將棋の駒のやうに小さく眺められた。丘から谷へ、谷から丘へと渡り歩いてゐるうちに、大崎はまた見捨てて来た曠野のことを思ひ浮べた。併し自分の腹がきまつたせいも、昨日、捨てて来た曠野も畑も小屋も最早や未練はなかつた。ただ焼畑の所有地標の傍の土饅頭がたまらなく悲しかつた。「あれは、全部お骨にして持つて来ればよかつた。もう、誰も、あそこへお詣りに行くことが出来なくなつてしまつた」と思ふと、本當に濟まない氣持ちがした。彼は、こまごました物と一緒に包んで持つてゐる郷里から持つて来た幾つかの小さい古い位牌を思ひ出した。

丘の上は海の方から吹いて来る濕つぽくて寒い風が強く當つた。併し子供たちは町の見物のやうに珍らしがつたり、驚いたり、不安がつたりすることなしに、丘や坂路や谷などを、さも自分達のものやうに駆けまわつて遊んでゐた。午後の日脚は遊び廻る子供らにも、又ぼんやりしてゐるやうでも、様々のことを思ひ出しては考へてゐる大崎にも、あつけなく短いものであつた。曠野の涯に日が落ちると、青紫の冷い霧が煙のやうに漂ひ、谷間や市街地の大きい家並や丘の麓の蔭から白い霧が霧目をして浮び上つて来た。大崎が子供たちと丘を下りて橋の上へ来る頃には、美しい灯が霧の中に、鈍く、やけて眺められた。

黄昏の上に海霧で一層暗くなつた街に兩側の店の電燈や、パアのネオンサインが、麗な、彩やかな色を漂はせて、曠野の晩夜になれた子供たちは、伽喃の國へ来たやうに思ひ、眠さも忘れて、いつまでも目を光らせ街をきよきよ眺めながら停車場の方へ歩いた。停車場では、まだ時間が澤山あつたので、驛前の待合室でかけ蕎麥を食べて、驛へもどつて時間を待つた。日の暮れるのがひどく早くなつたので、暗くなつてから七時までは仲々待ち遠うしかつた。子供たちは急に眠けが出て、とうとう、譯のベンチに腰かけて、何んの心配けもなさそうに眠り込んでしまつた。大崎は長い時間を待つよりも、子供らの氣持よさそうな假寝の顔を見るのが、耐えられぬ、つらい心持であつた。子供らを小樽へやることをやめようかとも思つてみた。「併しそうした處でどうなるだらう。子供らをつれて此處で家を持つことも出来ぬし、子供らをつれて稼ぐ當てもないではないか、木賃宿だつて子供ふたりつれて泊つてゐたんでは、稼ぎにも出られんし、結局、三人とも食ひつめてしまふのではないか。」

といふ考へが、彼には一番、筋道の通つた考へであつた。彼は本當に自分の、しようとしてゐることの恐ろしさも、慘酷さも、判断が全く麻痺してしまつたやうに、わからないのであつた。然も、その他に、一層恐ろしい誘惑が彼を掴みかけてゐた。それは、橋の上で河や海や船を眺めてゐるときに聞いた蓄音機の甘つたるい唄の女聲でかき立てられた劣情が、しつこく彼を悩ますのであつた。そうして深い、息づまるやうな海霧の夜氣と、紅や青や紫や黄金色のネオンサインの華やかな霧の中の反映とが、彼の劣情を一層激しく驅り立てた。彼は、明らかに自分の本心

に氣づいた。女が慾しいのであつた。そうして女を求めるためには、正直な處、子供たちは邪魔であつた。彼は女を求める爲めに、早く獨りになりたかつた。彼は、じりじりと焦げるやうな、いらだたしさを感ぜながら、汽車の時間を待つた。驛の待合室は次第に旅客や見送人で賑やかになつて來た。大崎は子供らをゆすぶり起して、切符を買つて來るから、この場所を動かさずに待つてゐれと言つて、人込みの中へ入つて行つた。人にもまれて、やうやく小樽までの子供の切符二枚と入場券を買つて戻つて來た。それから、七圓の金を小さい錢入れに入れて、秀造に持たせた。切符を手に握り、大崎も子供たちも人込みの目まぐるしさに、のぼせ上るやうな上氣した顔をして群衆の中に吞み込まれてゐた。先を争ふやうに改札口を出て橋を渡り、暫らくプラットホームに佇み、やがて暗の中を明るい汽車が入つて來て、乗り降りの人込みに、もみくちゃにされ、やうやく席を取つて二人の子供を窓際に向ひ合ひに坐らせ、走つて行つて呼賣の辨當を二つ買つて來て二人に渡した。

「切符は帶の間さ、しつかと、しまつて置けよ。落したりしたら駄目だぞ。あしたの朝九時に小樽さ着けば、みんな降りるんだから、それまで降りたら駄目だぞ。小樽さ降りたら、あつちの小母さんが迎ひに來てくれるから、心配なんかしなくてもいい。辨當は今夜寢て、あしたの朝起きたら食べれよ。今夜は、もう腹一つばい食べたから、汽車が出たらすぐ寢れよ。お父もすぐ後から行くからな。達者でぬれや。」

と大崎は二人に言つてきかせた。

子供たちの傍へも、乗客が席をとらうとしたので、大崎は追ひのけられるやうに車外へ出た。そうして、プラットホームから窓硝子越しに、いつぱい詰つた乗客の肩の向ふに、きちんと向ひ合つて座つてゐる子供たちを見ると、大崎は、すたすたとプラットホームの人込みを分けて橋を渡り、驛の出口から出た。彼はただ何處へなりと、早く行つて終ひたかつた。彼は當てなく、併し今日一度、往復しただけでも目に馴染んだ一番賑やかな通りをすたすた歩き出した。その時、汽車の汽笛の響が背後で、夜の空氣をつん裂くやうに鳴り震はせた。彼は思はず、ぎよつとして背後をふりかへつた。驛の構内を、建物と建物の間を、光り輝く、幾つもの眼を腹に並べてゐる黒い大蛇のやうな生き物が逼つて行くのが見えた。彼は安堵と不安と後悔との入り亂れた不思議な吐息を以つて、その遠ざかつてゆくものをぢつと見送つた。汽車は煌々と車内の燈火の光芒を大崎の眼底に残して、闇の中へ消え去つた。

「しかたがないんだ。」

長い、深い吐息の後で大崎の思つたただ一つのことは、この氣持であつた。そうして同時に、それが全部でもあつた。そういふ氣持は、單に、一秒毎に遠ざかつて行く子供たちに對してばかりではなくて、彼自身に歸着し、彼に負はせられる過去の一切の出來事の責任に對しても、今、彼はそう考へる他には、考へやうのないことを感ぜずにはゐられなかつた。そうしてこの自己辯護の言葉と氣持とが、最もよく彼を慰めてくれるのであつた。彼はやがて、街の方へと歩き出した。

海霧は益々濃く、深くなつて来た。バスはしきりに鋭い警戒の喇叭を鳴らし、海の方から聞えて来る霧笛の太い聲が野獸の咆哮のやうに霧の幕を震はして響いた。やがて、彼は、ラジオや蓄音機の雑然と喧しい賑やかな唄聲に気がついた。とある横通りに来ると、そこは祭の夜のやうに、夜店があり、カンテラの光りが霧に反映し、瀬戸物やバナナや古着の叩き賣り屋が聲を囁らして叫んでゐた。そうしてそれにつづく多くの屋臺店からは、焼鳥や支那蕎麥やおでんや焼酎の匂ひが、むせかへるほど漂ふてゐた。低く垂れこめた厚い霧は一層その匂ひを濃く街上に沈澆させてゐるのであつた。大崎は、とうとう焼鳥屋臺店の一つへ入つた。彼はそこで銚子を二本飲んだ。焼鳥の、焼きこげた脂つこい味と、久しぶりの酒とで、彼は一時に酔ひの廻るのを感じた。

「旦那は、春探ですか、鳥取ですか。」

と五十歳がらみの女將が彼に尋ねた。

「おらですか。いや、おらは、もつと遠い處のもんです。」

大崎は、「旦那」なんかと呼ばれたことは、夢にもなかつたので、店には客は自分一人であるにかかわらず、思はず周囲を見廻して、「おらですか」と聞いたのであつた。そうして彼の返事は、彼が他の土地から来たものであることを、正直にさらけ出してしまつたのであつた。その上、彼が農夫であることは、女將にはすぐわかつた。女將は、上手に話をもちかけて、彼に一晚五圓で綺麗な若い女をお世話しようと言ふ話まで、とうとうもつて行つた。併し大崎は、自分自身のうちには感情の動くのを感じながらも、反對に働く怖れや不安や警戒の氣持に抑へられてゐた。

彼は近所の安宿を教へて貰つて、にたにた笑ひながら、女將の悪どい、挑撥的な戲談を後ろにし、て屋臺店を出た。彼は悪い誘惑から自力で遁れたやうに、ほつとし、且つ誇りらしいものを感じた。彼は教へられた、近くの河岸にある安宿へ行かうと思つて、横町から横町へと、その方向へ歩いて行つた。すると、霧の中から、つと一つの黒い女の影が彼にびたりと寄り添ふて、さも彼の連れでもあるやうに並んで歩き出した。彼は思はず立ち止まらうとしたが、彼の袖口が、掴まれてゐて、そのまま歩みをつづけるやうにと引つ張られてゐるのがわかつた。黒い女影と見たのは、老婆と言ひ度い位の、もうかなりの年齢の女であつた。

「旦那、わたしと一緒に来て頂戴。とても、綺麗な、若いのお世話しますから。高等ですよ。丸鬚で、奥さんと同じですよ。朝までで三圓。高いやうですけど、朝御飯付きですよ。宿屋へ泊るより、得で面白いですよ。」

黒い女影は、ひそひそと、併しねつつこく彼に誘ひの手をかけた。大崎は今度は不意を襲はれて、思はずも、心の根のゆるぎを感じた。彼には拒み防ぐ力が全く抜けてゐた。

「よし、わかつた、行く、行く、連れて行つてくれ。」

と大崎は低く喘ぎ、うめくやうな聲で言つた。が自分では街いつばいに怒鳴つたやうな氣持ちで自分の言葉を聞いたので、もしや通る人たちに聞かれたのではないかと思はず、あたりを見廻した。

「有難う。一緒に歩くと、警察の人がうるさいから、おらの後をついて来て下さい。少し、廻

り道するけど、遠くはないから。」

黒い女影は細い聲でそう言ふと、そのまま、すたすたと先きへ歩いて行つた。そうして間もなく横町へ曲がつた。大崎もついて曲がつた。かうして幾つもの横町と路次とを、引き廻はされ、この町に不案内な大崎には全く見當のつかない方角の、穴底のやうな、ある路次の奥の家に導かれ、その二階で丸髷の、厚化粧の女にひき合はされ、したたかに酔ひつぶされて了つた。

翌朝、迎ひ酒で赤く熱くなつた顔の大崎が、火照る眼で女の顔を眺めながら、勘定をきくと、十五圓からの額になつてゐた。大崎は三圓の約束であつたがと言ふと、それは、お決りだけのことで、そのほかのお酒とお料理とお祝儀で、それだけになると言ふのであつた。大崎は、しまつたと思つたが、今更どうにも致し方がなかつた。どう考へたつてひどいぼりやうではあるが、さりとて、話をうまくつけて戻るやうな腕も度胸も持ち合はせてゐなかつた。彼は一刻も早く逃げ出さねば、財布のありつたけを搾りとられてしまふと、身震ひした。彼は隠すやうに財布から五圓札三枚を出して、女へ渡した。そうして、「有難うございました。また、どうぞ」と言ふ女の冷笑するやうな言葉を背後に聞いて、路次の奥の家を飛び出した。路次から、どこかの横町のやうな通りに出たが、彼は一體、自分が何處にゐるのか全くわからなかつた。彼が、かうして自分の所在もわからず、そこに佇立してゐることは、丁度彼の心持を象徴してゐた。彼は、泥酔と耽溺とから来る重い頭痛で、顔をしかめながら、とにかく歩いてゐたら何處かへ出るだらうと思つて歩き出した。少しすると、通りの或る家から時計の鳴る音が突然聞えて來た。彼は數えるともな

く數えてゐると、時計は十時を打つた。その最後の音を聞いたとき、彼は愕然と驚いた。彼はその瞬間に、もう一時間も前に小樽に着いた筈の子供たちのことを思ひ出したのであつた。彼は胸元の割れるやうな動悸と、かきむしられるやうな不安とに目がくらみ、今にも倒れそうに感じた。今朝の九時に着いた筈の子供たちは、それからもう一時間もたつてゐる今頃、どこを歩いてゐるだらう。迎ひに來る筈の小母さんをどんなに待つたらう。停車場を出て、町のどつちの方へ行けばいいのか、その不審が始めて子供たちにわかつた時分なのだ。降りた時はわからないでも、一時間も、うろつき歩いてゐる間には、いくら馬鹿だつて、それがわかる筈だ、そうだ。おらは子供たちを騙したのだ。あれらには始めつから行く先はなかつたのだ。汽車へ乗せて遠くへやつてしまつただけなのだ。腹はどうだらう。朝の辨當を食べたらうか。まだ、へつてはゐない。でも、もう二時間もすれば、歩き廻つてゐるのだから、きつと腹がへるに違ひない。でも、あれらは、金錢を持つてゐる。子供らのことだから、晝飯も食べないで、ひどく腹がへるだらう。それでも、歩いてゐる。すると、すぐ日暮れだ。晩飯と、泊るところをどうするだらう。どんな馬鹿でも、遠くへ捨てられたことがわかるに違ひない。

大崎はもう、たまらなくなつた。ちつとしてゐられなかつた。白晝の町に喚いて助けを求め度いやうな氣持で、「どうせばいいか」と言ふことを、痛む頭でぐるぐる考へ廻すだけで、夢中であちらこちら、町から町へと歩みつづけるばかりであつた。彼は放心したやうな、虚ろな心持で街を歩いてゐる内に、広い大橋に通ずる通にひよつこり出たことを知つた。彼は迷路から脱し

得たやうな喜びと、街を往來する多くの通行人の中に入つた心安さを感じ、暫く歩みを休めて橋の上から河の流れや河岸を見下ろしてゐた。

「稼き口を見つけないならぬ。」

と彼は思つた。それは彼の、こんがらがつた頭に物事を考へる少しの餘裕が出て來たのであつた。そうしてその考へは、目の下の河岸で一人の老人の漁夫が鋪石の上に、どつかと胡坐をかき、何んの漁に使ふのか、太くて長い長い釣繩を吟味しながら、蛇のとぐろを巻くやうに、巻いてゐるのを見てゐるうちに、ふと思ひ付いたのであつた。その老漁夫のしぐさは、ゆつたりと規則正しく、仕事に安心しきつて、楽しそうに見えた。その何の屈托もなさそうな姿を見、河岸に繫がれてゐる小さい發動機船が、ゆるやかな、悠々とした流れにゆらゆらと揺られてゐる様を見ても、次第に彼の氣持ちは静まり來るのであつた。そうして漁夫の生活が自分達、百姓の暮らしよりも、どんなに平穩で、恵まれてゐるのだらうかと思つた。彼は漁夫か濱稼ぎの仕事に入らうかと考へた。彼は橋のたもとから河岸の方へ降りて行つて、釣繩を手入れしてゐる老漁夫の傍に、しやがんだ。

「爺さん。おら、漁仕事に稼きたいんだけど、何處かに口はないもんだかね。」
と大崎は尋ねた。

「漁仕事もこの頃は全く閑だからなあ。仕事がなくて、人があり餘つてゐるだよ。」
「でも、魚とつて来れば、いくらでも錢になるべさ。」

「そうはいかんよ。魚はとつて來たつて、陸さ上れば、まるでただみたいな値段だもの。何んせ、ひどい不景氣だからなあ、いくら稼いだつて、どうもならん世の中になつたんだよ。」

と老漁夫は手を休めずに言つた。そうして大崎に尋ねた。

「あんた、今まで何仕事して來なすつた。」

「おらは、つい此の間まで開墾百姓してゐたけど、あんまり凶作つづきで、百姓に見きりをつけて出て來たのだよ。」

「農家が悪いときには、漁の方も悪いと見える。妙なもんだなあ。」

「でも、漁の方はいいべさ。どんなに不漁だつて、陸の凶作のやうに、一年中、何んにも獲れないつてことはないからなあ。」

「そのかはり、いつ命とられるかわからんもの。ひとつしかなない命つこをなあ。」

話は變な漁樵問答のやうになつて、大崎の稼き口のことなんか何處かへ行つてしまつた。大崎の得たことは漁仕事も不景氣で、沖といはず濱といはず、何處も彼處も、人減らして大變だと云ふことであつた。

「まあ、濱の方さ行つてみなさい。何處もまるで火の消えたやうなもんだから。」

と老漁夫は半ば慰め顔に言つた。大崎は河岸を傳はつて濱の方へ行つてみたが、なるほど、濱方面も淋しかつた。寒い海風に吹きさらされながら、海岸通りや倉庫の前を歩いてみたが、船らしい船も碇泊して居らず、荷役中の傳馬船も見えず、倉庫も、がらんと空いてゐる様子であつ

た。彼はあちら、こちら、ぶらついて元の大きい橋まで戻つて来た。ここまで来てみると橋の上は、かなりの人通りで、彼には何處に不景氣と云ふものがあるのかと不思議に思はれるのであつた。彼は大きい橋を渡つて、人通りの多い通りを右へ折れて歩いた。町は次第に古びた家並になり、淋しい通りになつて来た。彼はそんな方へ行つても、稼ぎ口が見付かる筈もないと思つて、引きかへして、大きい橋の突つつきに連つてゐる高い丘へ登る坂道を上つて行つた。其處は昨日も子供たちと、ぶらついた丘ではあるが、今日の彼に稼ぎ口を授けるやうな處も見當らず、彼はただ街から街へと歩き廻つて徒らに勞れを増すにすぎなかつた。彼は、丘の一角から、目の下の市街を眺め下ろした。彼に不思議に思はれるのは、これだけびつしりと家が立ち並び、これだけ人間の住んでゐる大きい町で、自分一人を食はしてくれるだけの稼ぎ口がないのかといふことであつた。いくら不景氣だと言つても、あれほど人間が住み、動いてゐるのに、おれ一人の働く處がないといふのは本當の事だろうか。それが彼には不審でならなかつた。

夕方の終業の汽笛が一齊に、あちら、こちらで鳴つた。彼にはその音が、仕事のあることと、希望とを告げるやうに思はれた。彼は夕暮の町へ下りて行つて、その夜は木賃宿へ泊ることにした。今や、昨夜の大散財が馬鹿馬鹿しく大損をしたと考へられた。あの金で木賃宿に、ひと月は樂に泊れたのだつたに、と後悔されてならなかつた。そうして、昨夜の反動に今夜は一錢も惜しい氣持になつた。彼は河岸の裏通りに見覺えて置いた木賃宿へ行つた。そこには、看板に「一食十錢より、一泊朝食付三十錢」と書かれてあつたのを覺えてゐたのであつた。一日五十錢で樂々

と一ヶ月暮せる十五圓が一晩の女のために手の中から抜けて行つてしまつたのが恨めしく、それが、北星や馬車や夜具布團や着類や畑のものなぞ、様々の姿で彼の目にうつり、やがて煙のやうに消えて行くのであつた。彼は、元から何も持つてゐなかつたと同様でなく、大切なものを奪ひ掠めとられた後の悔恨と寂寞とに押し包まれてゐるのであつた。

「持たないものは、一層持たないやうに骨までしやぶられ、貧乏者は一層ひどい貧乏者に落ちるやうになるもんだ。」

と、骨の髄までしみ徹るほど、しみじみ悔恨の念を深めた。

河岸の裏通りにある木賃宿の戸を開けて入ると、そこは板敷で汚い長い食卓と、長い腰掛が据ゑられた薄暗い食堂であつた。三、四人の黒い、むさくるしい姿の男が、思ひ思ひに腰を掛け、食卓にしがみつくやうに、背をまるくした姿勢で晩飯を食べてゐた。彼等は大崎の入つて行つたのに目もくれず、井にかぶりついてゐた。大崎が入つたまま、佇んでゐるのを見て、亭主らしい男が、ぶつきら棒に、

「いらつしやう。」

と、暖れた聲で言つた。大崎は、あはてて、お辭儀をして、亭主の方へ近づいた。

「おら、今晚、泊めて貰ひ度いと思つて。」

と大崎は亭主の顔色を窺ひながら、断られるのを恐れるやうに、おじおじとした聲で言った。
「ようがす。泊りは二階だから、上つてください。宿賃は先きに拂つて貰ひます。あしたの朝飯は、いりますかね。朝飯付きだと三十錢貰ふことになつてゐますが。」

「どうせ朝飯は食べなければならんですから。」

大崎はそう言つて、三十錢を亭主へ渡した。亭主はそれを受取ると、ひどく汚れた宿帳を取り出して、大崎に尋ねた。

「所、番地と名前は、」

「釧路國川上郡虹別原野、六十九線北十九號、でも今はそこを出て、釧路さ稼ぎに移つて来たのですが。」

「まあ、虹別にして置けばいい。」

と亭主は應揚に、無造作に言つた。大崎は、何かしら、ほつとした。始めて自分に同情してくれる人間に逢つたやうな氣持がした。

「名前と職業は。」

「大崎常造、三十六歳、農業。……でも、今は農業をやめたのですが。」

「常造のぞうは、造かえ、藏かえ、一、二、三の三かえ。」

大崎は變にむづかしいことを聞くもんだと思つたが、「造の造です」と答へた。

「職業は、やつぱし、農業にして置くさ。農業やめて来たつて、誰が見ても、あんたなら、百

姓としか見えないから。」

「ええやうにして置いて下さい。生れるところの百姓だから、土臭いのは、一生、洗つても落ちんでせうから。」

と大崎は自分から戲談の一つも出すほど、この亭主の屈托のなさそうな様子に安堵したのであつた。

「虹別から来たつて言へば、今年もひどい凶作だつたそうだね。随分ひどいと見えて、虹別からぬけ出て来るもんが多いやうだよ。尤も、虹別に限らず、釧路近傍だつて、ひどい凶作だからなあ。」

と亭主も大崎に餘程、氣をゆるして来たやうで言葉も、ぞんざいになつた。ただ大崎に心配になつたのは、虹別からぬけ出して来る者が多いと云ふからは、この木賃宿にも入り込んで来てゐはしまいか、此處で、ぐずぐずしてゐる間に、誰か知つた者に出逢ひはしまいかといふ懸念であつた。

「今、誰か虹別の者が泊つてゐますか。おらの知つてる者も、かなり土地を抜け出したが。」

「今は、誰もゐないけど。何せ、この釧路も、ひどい不景氣だから、折角出て来ても仕事が見つからないで、外へ行つてしまふで、結局、むしろ木賃宿も大不景氣といふわけだよ。農家が凶作でも、釧路が景氣よければ、港や町さ出かけて来る百姓たちや、出稼の人夫たちで、おらたちも助かるんだけど。何せ、今度の不景氣は世界中、何處でもの不景氣だつてことだから、この釧

路の港にさえ、幾日も、幾日も汽船一艘入つて来ない有様さ。かうなつたら、早く冬になつて、うんと雪が降つて呉れなければ、労働するもんは、餓死してしまはんばならんなあ。」

と亭主は言つた。大崎は、もうそういうふ話から逃げたかつた。何處へ行つても、お前のやうなものには生きる術も権利もないぞと言はんばかりの話を聞かされるだけであつた。

「親方、おらに、十錢の晩飯一つ食はして下さい。」

と言つて大崎は十錢を亭主へ差し出した。亭主は形ばかりの料理場の方へ、「十錢一丁」と大聲で呼び、それから大崎へ言つた。

「まあ、掛けなさい。ここがうちの食堂で、食べるのは、みんな此處で食べて貰うことになつてゐるから。」

大崎は腰掛けた。亭主は、苦い番茶をくんでくれた。間もなく中位の井に盛り切りの飯に、馬鈴薯と魚の切れ端との煮込み一と皿が彼の前に置かれた。彼は、のどを鳴らし、舌鼓をうつて食ひ食べた。彼が夢中になつて食べてゐる間に、彼から、やや遠く、筋違ひに腰掛けてゐた、彼と同年輩位の男が番茶を飲み干して大崎に話しかけた。

「こんな仕事のない年も、珍らしいもんだねえ。おらは、今日でもう三日、探し歩いてゐるが、まだ見つからない。職業紹介所へ頼んでも疎な口はないよ。かうなつたら、鮎アサギにでもなるより他に、しようがないさ。」

「そんなに仕事がないんですか。」

と大崎は嫌々ながら返事をした。

「無茶苦茶にないね。處で君は、煙草を一本進呈してくれんかね。」

とその男は、にゆつと大崎の方へ手をさし出した。大崎は蛇ヘビににらまれたやうに、思はずあはてて、たまにしか吸はぬために、とつてあるバットの半分ほど残つてゐる函を彼へさし出した。

「豪勢なもんだね。では、折角だから二本もらつて置くよ。」

と言つて男は二本抜きとつて、後を大崎へ返へしてよこした。大崎はそれを急いで、ズボンのポケットへ入れた。

「ところで、君は、どんな處で稼がうと云ふのかね。」

と男は煙草をふかしながら思はせぶりに、大崎に尋ねた。

「何處つていふ望みはないです。何處でも仕事にさえつけられればいいのですから。」

と大崎はもしや、この男が煙草のお禮に仕事を世話してでも呉れるのかと思つて言つた。

「おらも、そう思つて探すんだが、仕事つてものは仲々見つからんもんだね。」

と男は急にそつばを向いて返事をした。大崎は、はつと氣がついた。バットを二本、騙り奪られたやうに思つた。併し彼は、向つ腹を立てるよりも、ぞつとして恐ろしくなつた。大崎は黙り込んで、飯をかき込み、煮つまつた番茶を飲んで立ち上つた。

「くたびれてゐるから、ご免なさい。」

と大崎は誰へともなく言つて、亭主の腰かけてゐる、二階への上り口の方へ行つた。

「親方、くたびれてゐるで、寝させて下さい。」

と大崎は言つた。そうして亭主に案内されて二階へ上つて行つた。ひどい悪臭のこもつた、天井の低い、屋根裏のやうな、八畳間位の部屋が二つ並んでゐた。暗い電燈が二つ、笠なしで球だけ、ぶら下つてゐた。思ひのままに、煎餅布團にくるまつた黒い姿が、五つほどころがつてゐるのが見えた。亭主は、廊下の押入から敷、掛一枚づつの、薄い布團を取り出して、大崎の前へ置き、ぼんやり立つてゐる彼に、

「何處でも、いい處へ寝て下さい。」

と言つて下りて行つた。大崎は廊下に近い片隅に布團を敷き、財布は風呂敷包みに入れて、抱いて寝た。身體が落ちつくことと思ひ出された。子供たちは、小樽の最初の夜である今晚をどうしてゐるだらう。何處かの木賃宿にでも泊めて貰つてゐるだらうか。子供のこゝとだから、そんな智慧が出ただらうか。悪い奴に騙されて、あの七圓の金錢を奪られてしまひはしなかつたらうか。そう考へ始めると、大崎は初めて自分が子供たちに對してした事の本當の意味がわかつたやうな氣がした。併し悪利口な別な考へも浮んで來た。「どうにも、しかたがなかつたのだ」と思ふと、その自己辯解を諦めとが、彼を一層深く悲しませて來るのであつた。涙が頬を傳はつて落ちるのを感じた。併し身體が温まるにつれて眠りが來た。彼は明日の朝は早く、職業紹介所へ行つてみようかと、それを唯一つの希望として眠りに入つた。

翌朝もひどい霧であつた。曉の暗い中で、木賃宿の泊り客は、ごそごそと起き上り、下の食堂

で、ほとんど汁だけの味噌汁に菜葉の漬物で、井に盛り切りの朝飯をみんな黙りこくつて食べ、先を争ふやうに外へ出て行つた。大崎は後れると番が後になつて仕事にあふれると氣がついたので、急いで後を追ふた。彼等は腕組みをしたり、手を懐たもとに入れたり、ズボンに突つ込んだりして、いづれも黙つて、すたすたと歩いてゐた。一番先きに歩いて行く一人が、つとしやがんで路上に捨てられてゐた煙草の吸ひ殻を拾ひ、ふつふつと吹いて塵を拂ひ、右耳へ挿んだ。

「縁起がいいぞう。」

と後の一人が叫んだ。先の者は、ちよつと背後をふりかへつて、にったりと笑つた。

「それを捨てた奴は、ゆふべ女に持てた奴だなあ。うれしいもんだから半分しか吸はないで投げたんだ。」

と一人が喚き笑ふやうに大聲で言つた。

「いや、持てなかつたから、やけで投げ捨てたのよ。」

と他の一人がまぜつかへした。

「いくら羨ましくたつて、誰にも吸はせんから、安心してゐれ。」

と煙草を拾つた男が言ひかへして笑つた。

職業紹介所はそう遠くはなかつた。空が白けただけで、まだ朝日が射さず、その上に霧が深いので、家々はまだ眠つてゐたが、紹介所の中の板土間から入口の外まで、黒い、汚い、異様の姿のものたちが集つてゐた。その中には女たちの姿も見えた。大崎には、彼等はただがやがやと立

ち騒ぐ人間のかたまりとしか見えなかつた。百姓として朝の暗い内に起きて畑へ出ることは馴れてゐるが、かうしてその日の仕事にありつくために集り騒ぐ人間の糶市場のやうな人込みの中へ自分で入いつた最初の経験を、彼は恐ろしいが物珍らしい見世物の中にあるやうに思つた。彼はどうしてよいのか全くわからなかつた。畑仕事のやうに仕事が自分を待つてゐてくれるのではなくて、この人込みの中から仕事を奪ひ取らねばならぬのだといふことがやうやくわかつて来た。そうして百姓育ちの者に、どうしてそんな腕ききなことが出来るか、彼は既に氣持に於いて、蹴落されてしまつた。やがて、事務所の板土間から、がやがやと彼等が押し出されて来た。みんなは、どす黒い、汚い顔で、ぶつぶつと不平不服を鳴らしてゐた。その多数の群の後から、ほんの少人数のものが、うれしくてたまらないのだが、にこにこ顔を半ば抑へつけてゐるやうな、妙にとりすました様子で、手に手に小さい紙切れを持つて出て来た。この少人数の、にこにこした顔のものは、がやがやしてゐる群からこつそり逃げ去るやうに抜けて、幸運にも授けられたその日一日の仕事へと散つて行つた。

今や、大崎にも事情がすつかりわかつた。最早や、その日一日そこに立つてゐても、仕事といふものは、降つても湧いても來ないのである。ぶつぶつ、がやがや言ひながらも、やがては黙りこんで、力のない姿で、何處かへ散つて行かねばならぬ大多数の者の群と同じやうに、大崎も、とにかく、何處かへ行かねばならぬのであつた。その時、彼はふと近くでこんな聲を聞いた。

「おれ、五錢、割増しつけるから、おめえの札、おれに賣つてくれろよ。」

「うん、やつてもいいけど。五錢なら、安すぎる。十錢出せや。」

「十錢出したら、損するでないか。」

「でも、おらは、あした、あぶれるか知れねえ。そしたら、おら、大變だ。」

「そんなら、八錢まで、きばるから、よかべよ。」

「うん、しかたない。そんなら、錢出せや。」

大崎には、二人のまだ若い労働者がそう言つて、切符と錢とを交換し、さつさと別れて行く様子を見て、何んのことだかわからなかつた。大崎は、變なことをするものだと思へながら歩いてゐる内に、ふとその事がわかつて来た。彼は全く感心させられた。

「敵はない、まるで高利貸みたいなものだ。」

彼は、自分の新しい仲間の中にも、かう云ふ凄惨な人間があるんだといふことを始めて知つて驚いた。昨夜、自分から煙草二本も騙して取つた男の顔が續いて思ひ出された。

彼は明け方の霧の町を、あてもなく歩いた。ある通りを歩いてゐると、彼はふと家の軒近くを歩きながら、すばやく軒につるされてゐる牛乳壺をかつさらつて行く労働者の姿を見つけた。次ぎ次ぎに五、六本も懐へ入れた處で、男はちらと大崎の方をふり向いて、見つかつたと思つて、ひらりと横町へ身を隠してしまつた。大崎は度膽をぬかれ、あつげにとられて暫く立ち止まつた。やがて又、彼は歩き出したが、あの男が亂暴に彼に言ひがかりをつけに出て來ないかと思ふと、足が竦むやうに思はれた。彼は男と反對の横町へ折れ、出来るだけ急いで歩いた。暫くし

て彼は誰も後を追ふて来ないことを確かめて、ほつとした。大崎はその内に何故かしら、あの男を羨ましいやうに思つた。朝早く、軒先の牛乳壘を掻つさらつて行つて飲むことは全くうまい思ひ付だと感心させられた。併し、自分にはまだ、とても出来そうには思はれなかつた。「愈々行き詰つて、どうにも、しかたがなくなつたら、お前もあれをやるか」と彼は心の中で自分にきいてゐた。でも、何んとも返事が出来なかつた。丁度その時、右側の店屋のくぐり戸がぱつと開き、若い店員が一人外へ出て来た。

「あつ、今日もとられてゐる」と叫びながら、店員はあわただしく内へ入つて行つた。この叫び聲を耳にして、通りの真中を歩いてゐる大崎はほつとしてその方を見た。やがて、刺々しく高い、二、三人の男の聲が聞えて来た。

「それあ、どう考へたつて、労働者のやる事ですよ。それにきまつてゐる。」

「それに違ひない。ひどい不景氣だからな。仕事にあぶれた奴が、とつて行くんだ。」

「あいつぢやないかなあ。」

そう云ふ囁き聲まで大崎には聞えるやうな氣がした。大崎は自分の潔白を示し、牛乳盗人を、今そこで見たことを告げたいと思つたが、併し自分の心が何んだか後めたくて背後に迫る追手があるやうな恐ろしさにおびえながら、自ら早くなる歩度を出来るだけ後へ仰へてゆつくりと歩いた。そうして暫く行つて、誰も追ふて来る者のないのを知つてほつとした。

日が昇つて来た。霧がやや温かみのかかつた卵黄色に映え、街がぼろと明るい色を帯びて来

た。通りの家々の戸が開けられ、汽笛の音や車の音が聞え出した。大崎は、そういう朝の營みに動き出した町の中で、自分だけがたつた一人、除け者にされてゐるやうな氣持がした。自分の周囲の動き、動き出した事物の中を、自分だけが、それらとは全く關係のない者のやうに、のそりのそりと歩いてゐるのが、自分ながらひどく間がぬけて見えた。そうして晝頃や午後ならばまだしもものこと、朝つばらから足を停めて思案するに適當した場所など、彼の労働者の風體では何處にも求めることが出来なかつた。彼は足にまかせてぶらぶら歩き廻るより他に、この周囲の動きに適應する術はなかつた。彼はかうして、大きい橋を渡つて、高い丘に沿ふた通りをすつと端の方まで行つた。彼はそれから又、引き返して、途中から横町へ折れて、左河岸へ出てみた。その邊には、さすがに少しは労働者の姿も見えたが、彼のために興えられそうな仕事を自分で見つけ出すほど、物事になれてゐなかつた。彼は河岸をぶらぶら歩いて、また元の大橋を渡り、向河岸へ出た。魚市場がとても賑やかで、すばらしい商ひのやうに見えるので、その雑沓を眺めたり魚市場に近く出並んでゐる小さい屋臺店が祭のやうに賑やかに思はれて、いつの間にか浮き浮きした氣持ちに引き込まれてゐた。それにも拘らず魚市場から出て来た若い男が、「かう、不景氣がひどくては、魚だつて賣れやしないよ、どこの家でも、大根葉に、おからばかり食べてゐる」と、誰かに、どなりつける聲が聞えた。大崎は、こんな勢のよい、賑やかな魚市場にも、そんな不景氣があるもんかなと思つた。大崎はなんだか變な氣がしてならなかつた。農家には、凶作つてもものは、はつきりとかうかう云ふもんだと手にとるやうにわかるが、町の人たちの不景氣と云

ふことは、全く掴み處のない、正體のわからぬものであつた。町はこの通りに、元氣に勢よく動いてゐるのに、おれにだけ不景氣といふ面を向けてゐるのではないかと云ふやうな氣持もした。町の人は、おらの相手になつてくれないのだ。不景氣と云ふのは、意地の悪い町の人たちが、おらをこの町からしめ出す術なのではないかとも考へた。彼は空腹と寒さを感じて來たので、魚市場の近くの蕎麥屋に入つて、鍋焼うどんを食べた。腹がよくなり、温まると、今日も仕事にありつかないのに、錢を使つたことを悔えた。彼はそこを出ると、なるべく今まで知らぬ通りや横町を歩いてみた。そうして或る横町に、「千島行き人夫頼む」といふ看板を出した周旋屋を見た。彼は立ち停つたけれど、「千島行き」と云ふことに躊躇した。いくら困つたとて、千島なぞへ行つたら、もう二度と歸つて來られぬやうな氣がしたのであつた。夕方まで、町から町へ、横町から横町へと歩き廻つて、すつかり勞れと失望とで元氣を失つた彼は、全く無抵抗に、ずるずるべつたり前夜の焼鳥の屋臺店へ入つた。香ばしい焼鳥と強い焼酎とで、彼は殆ど前後を忘れるほど酔つぱらつてしまつた。彼はたらふく食ひ、したたかに酔つて、夜更けの町を木賃宿へ、どうやら戻つて來た。そうして、まだ起きてゐる亭主に泊り賃三十錢を、よろけながら、前拂ひした。亭主はかういふ酔つぱらひに相手になるのを避けてゐたが、大崎は何が何んだかわけもわからずに、有頂天に嬉しかつた。

「親方、今日は一日中、仕事を探して歩いたですが、仕事なんか一つも見當らねえ。併し、あしたは、きつと見つけて來ますよ。なあに、悪い、この劍路の町に一つ位、おらのする仕事位はあるさ。ところで、親方、ゆるして下さい。おら、焼鳥屋で一つ杯、前景氣をつけて來ました。あんまり、何處さ行つても、凶作だ、不景氣だつて言ふから、胸糞が悪くなつてね。」

大崎は全く別な人間になつたやうに、まくし立てた。亭主は彼を押し上げるやうに二階へつれて行つて、布團を出して敷いてやつて階下へ降りた。大崎は尙ほも、しつこく、獨り言をいつて、やにはにシャツ一枚になつて、ぐたりと倒れるやうに床の中へもぐり込んだ。

大崎は實に氣持よく、ぐつすりと思つたが、傍から見れば、まるで悪夢にやまされるやうに、うなりつづけてゐた。彼が目をさました頃は、もう朝日がうすく窓にさしてゐた。彼は生あくびを幾度となく嚙んで、のび切つたやうに寢てゐた。河岸や港の方から、時々汽笛が聞えて來た。まだぼんやりしてゐる目で、周囲を見廻はすと、同宿のものは最早やみんなあなかつた。大崎は、何んだか彼等は對して自分が親方のやうに偉くなつたやうな氣持がした。彼はのそのそ起きて、着物を着はじめた。焼鳥の味と焼酎の香がまだ腹の中に、じつとりと濃んであるやうな氣分であつた。彼はふと、あわてて腰の廻りをさぐつてみたり着物や布團を拂つてみたりした。風呂敷包みがないのであつた。彼は目がくらくらとした。總身の血が一時に頭に上つたり、足へ下つたりするやうに感じた。彼は夢中になつて、又、布團をはね返へしたり、展げたりした。彼は茫然として、どつかり胡座をかいた。彼は色々と思ひ出してみようと務めたが、頭がぼやけて考へをまとめることが出來なかつた。併し焼鳥屋で勘定を二圓餘り支拂ひ、宿の泊賃三十錢を亭主に前拂ひしたことは、間違ひなかつた。そうすると、二階へ上るときに落したか、い

や、そんなことはない。相宿の誰かに盗まれたに違ひない。彼は着物を急いできて、階下へ下りた。彼は亭主に、朝食をちよつと待つてくれ、紹介所へ札かたをとりに行つて来るからと言ひごまかして宿を飛び出した。紹介所には、併し、もう誰も労働者の影は見えなかつた。その日の仕事にありついた好運のものは各自の仕事へ、大多数のあぶれたものも、既にそれぞれに散り去つてしまつた時刻であつた。大崎は今にも泣き出しそうな硬ばつた顔をして宿へ戻つて来た。亭主は彼のしよんぼりしたを見て言つた。

「どうかしたんですか。」

「財布と風呂敷包みを盗られてしまつたんです。」

と、大崎は殆ど泣き聲であつた。

「財布つて、あんた、ゆうべ遅く戻つて来て、かなりひどく酔つてゐなすつたが、わしにちやんと泊り賃を拂つて、二階へ上つて行つたですよ。」

「それが無いんです。ゆうべ泊つた人の内で誰か。」

「嫌なことだなあ。尤も木賃宿へ泊る人たちが、皆が皆、神様や佛様ではないに違ひないが、獨りて勝手に酔つばらつて来て、そんなことを言はれると困るからなあ。まあ、今朝の朝飯代は賣つてあるから、朝飯は上げるが、後はお立ちを願ひますよ。」

と亭主は、きつぱりと言つた。

「立ちますが、ゆうべ泊つた人たちは、何んと云ふ人たちだか、名前を。」

「誰がとつたにしろ、そいつは、もう今夜は来ないよ。それに名前なんか、どれも當てになんかなるもんか。まあ、あんたの不運だとあきらめるんだね。」

と亭主は最早や相手にならなかつた。そうして臺所の方へ、お泊り朝飯一丁、と呼んだ。やがて大崎は、ただ一人ベンチに腰かけて黙り込んで、冷えた、ぼろぼろの飯にぬるい味噌汁をかけて、かき込んだ。彼が朝飯を終て木賃宿を去らうとすると、亭主は、「たつしやでお暮しなさい」と、それでも最後の同情の印と言はんばかりに、そつけなく言つた。大崎は泣き顔をして、この痛い皮肉な錢別の言葉を上の空でうけた。彼はあてもなく、ひとたび足を町へとふみ出したが、思案のために暫く足を休めに停るべき處もない氣持であつた。苛々と、いまましくなる氣持ちにけおとされて、彼は午前の動き働きつつある街を歩いた。彼は盗られた財布のこと、風呂敷包みの中の幾つかの位牌のことばかり思ひ詰めてゐた。交番へ訴へて出ようかとも思つた。併し道路で落したのとはわけが違つて、ひどく酔つた上で、木賃宿に泊つて寝てゐるうちに見えなくなつたといふだけでは、彼は氣がひけるばかりか、何んだか後の祟たたかが恐ろしい氣持がした。彼は巡察の面前へ出るのさへ後込みするのに、まして巡察と一緒に木賃宿の荒れくれた男たちの間に出ると云ふことは氣味が悪かつた。あの財布と位牌はもう二度と自分の手に戻ることはないと諦めなければならぬと思つた。位牌の方は氣持ちが悪いながら、考へやうで、諦めがついた。併し財布の中の金銭は、今こそ非常に多額で、大事なものに思はれて、しみじみ惜しくてたまらなくなつて来た。彼は胸算で見當をつけてみた。まだ五十圓は残つてゐた筈だ。「五十圓といふ大金だ

つた！」と自分で驚いて、思はず聲に出して言つてみた。「五十圓！」

併しその大金が夢の中に消えてしまつたのだ。最早や何んとしても、一錢も持ち合はせはないのだ。朝飯は食べたが、晝飯はもう食べることが出来ないのだ。晩飯も食べられないのだ。それから、夜になつても、泊るところもないのだ。彼はふと子供たちのことを考へた。あれらは、まだ五圓位は持つてゐるだらう。いや、あれらだつて、もう三圓位しか持つてゐないかも知れない。でも、おらよりはいい。おらは、もう一錢も持つてゐないのだ。彼は急に自分の身體の力がすっかり抜けていつて、忽ちよぼよぼの、今にも野垂死にして終ひそうな老ひぼれになつたやうな氣がした。歩む足の運びも急に重くなつた。彼は、そんなつた擧句の自分が何處をどうして、うろつき歩いたか、何時、何處で夜を明したか、まるで自分のことがわからなくなつてしまつた。かうして文字通り彷徨の日夜が大崎に始まつたのであつた。

彼は最早や、飢ゑをしのぎ、寝る場所を求めるために、よろめき歩く野良犬のやうなものであつた。町の上の方面の何處かの家蔭にうづくまつて、寒さに震ひて寝るときは、彼は垣根に干してある大根を、もぎとつて嚙つたり、軒につるしてある秋鯖の干したのをとつて食べた。濱の方で倉庫や、引き上げられた船の蔭に寝るときは、秋鳥賊のなま干しをとつて食べた。これはとても甘く、飴でも嚙るやうであつた。併し夜の寒さは骨身にしみて一晩毎に、げつそり瘦せこける思ひがした。彼は、降るやうな星空や、霧の眞白い夜につつまれて曠野でした野宿や、彼の捨てて來た土地や、土饅頭の塚のことを思ひ浮べ、遠くへ離してやつた子供たちの身の上のことを思

ひやつた。子供たちのことを思ふと、寒さと餓ゑとが一層きびしく痛く、それが自分に對する刑罰のやうに思はれた。

彼は一晩毎に加はる寒さで冬の迫つたことが感じられるので、もう少し何んとかして夜の寒さをしのぐ方法を考へねばならなかつた。彼は丘の方の、とある狭い窪地の一隅に足がかりを見つけて、そこに荒蕪を集めて小屋を掛けることを考へた。彼はそこを野宿の家にするつもりで、濱や街の方から一枚、二枚と蕪や板や古鐵板を盗み集めて來た。併し彼の考へを根こそぎぶち壊すやうに、ひどい霧と、それに伴ふ暴風雨と、やがて吹雪が、丘も谷も窪地も町も吹き埋めてしまつた。その荒れ狂ふ風雪の下では、この窪地に蕪や板切れや古鐵板で小屋を拵へても、迫つて來る冬を越すことはとても出来そうもなかつた。彼は町へ出て、何處へでもぐり込まねば、凍え死んでしまふやうに思つた。彼は今や生きてゐる人間の生色はなく、いつの間にか身體は泥土にまみれ、踏踏として、さ迷ひ歩く死人のやうであつた。併しまだ彼には、町の家の軒下に立つて物を乞ふ元氣も、塵溜の箱に手をつつこむ勇氣も、また闇の中で盗む度胸もなく、夜が迫れば、行きあたりの温かそうな處へもぐり込み、食べられそうなものは手當り次第に口へ入れることしか彼の氣をひくものはなかつた。彼は何處かの崖からでも落ちて、ひどくすりむいたのであらうか、手足に赤黒い血のあとを付け、身體も着物も泥だらけになつて、心身共に文字通りにぼろぼろにすり切れてしまつた自分に全く氣がつかぬほど、最早や人間ではなくなつてゐた。

大崎は餓ゑと疲れと寒さによるめきながら、冬の迫つた、暮れやすい薄暮の中の街をさまよひ

歩いてゐた。彼の足腰は地を踏みしめる力もなく、今に小石一つに躓いても二度と起き上り得ないまでに、ばつたりと、のめり倒れて了ひそうであつた。彼自身もどうして歩いてゐるかわからず、ただ、がむしやらに、生に噛りついてゐる獣の、本能的で、無意識的な反射運動によつて動いてゐるに過ぎなかつた。彼の全くすりきれて了つた肉體と心、もしそれが今尙ほ存在するならば、眞に不思議な驚くべき奇蹟とも云はねばならぬ程ぼろぼろの心の何處か奥底に、ぼんやりと残つてゐる、少しばかりの惰性で歩いてゐるのであつた。ただ、があんと鳴つてゐる彼の頭は全く無意識のうちに何かを求めてゐるのか、自分でわからず、ただ彼の足の向く方角へ少しづつ足をひきずつて、さまよひ行くのであつた。

黄葉を、梢だけ少し残して、大方は散り落ちて了つたボブラの大木が、灰紫色に染つた空につつ立つてゐる或る屋敷の邊りに、彼がようやくさまよひ出た時には、日は落ちて人の顔がかすかにわかる位であつた。屋敷と屋敷との間の塀つづきの狭い道路には澤山の落葉があちらこちらに吹き溜まり、彼の泥で重くなつた破れ地下足袋にかさかさと、まつわりついて、勞れ切つた尾を一層重くした。彼はもはや、ただ倒れないやうにと足を運び動かしてゐるに過ぎなかつた。彼の少しく見覚えのある家へ物乞ひに行くことも、彼の最後の希望から姿を消してしまつた。初冬の日後の暗闇と、ぼやけてしまつた意識とは、彼に自分と周囲の外界とを判別させる事が出来なくなつて了ひ、彼はただ、自分の足の前の暗闇の中へ自分の他の足をふらふらと踏み出すことを反射的に繰返すだけであつた。やがて彼は全く飢餓をも忘れたやうな瞬間に陥つた。そうして、

ただ無性に自分の身體を横たへる場所がほしくなつた。それは彼にとつては當然、身を隠すやうな場所である。彼は長い長い黒塀に沿ふて、時々倒れさうになつてはそれに倚りかかりながら歩いた。そうすると、突然その塀が大きい口を開いてゐる處へ出た。そこは屋敷の裏口であつた。彼の身體は水が落ち口へ吸ひ込まれるやうに、その裏口から中へ吸ひ込まれた。屋敷の中は彼が氣持ちをほつとさせた程、暗く、ひっそりしてゐた。長い塀に取りかこまれた廣い屋敷の中は左の半分が野菜畑、右の半分が住宅で、その茶の間と臺所とが、野菜畑に面してゐた。硝子戸越しに見える、電燈の明るくともされた茶の間には人の影もなく、その燈火で照し出された道の突き當りには、丁度、臺所に面して黒々と一つの小屋が暗闇の中に立つてゐるのが、すぐ大崎の目に入つた。それは納屋であることが、すぐ彼にわかつた。それこそ彼にとつて、この上もない避難所であり、休息所である。彼は心ではせき立てながら、どうしても思ふやうにならぬふらつく足で、のそりのそりとその小屋の前へ行つた。幸ひに、彼を迎へるやうに戸が開いてゐた。彼は暗闇の中へ入つた。彼は闇をまたぐ時に納屋の内側に散らばつてゐる石炭屑のやうなものを、いやと云ふほど、ごつりと足裏に踏みつけ、思はず前へよろけて手をのべると、依の上に手が支えられた。彼はその依の上へそのまま腰をおろすと、がつくりと前へ折れ曲つて了つた。やがて彼はふと自分の臀の下の依に、ぎつしりと詰つたものが、馬鈴薯であるのに氣がついた。次いで漬け物の甘すつばい香りが、納屋の中の微くさい温氣と共に彼の鼻と胃袋とを刺戟し、口の中に一つはい涎のたまるのを感じた。併し彼は手を伸して、馬鈴薯や漬け物をとつて噛む氣力がなかつた。

彼はもはや本當に動けなかつた。臺所から流れ込んで来る電燈の光線が、納屋の入口を明るくしてゐるのを、ぼんやりと感じ得るに過ぎなかつた。そうして彼は正體なく眠り込んだ。

突然、大きな聲が、があんと彼の耳にひびいた。そうして、その聲が幾度となく繰り返されて、やうやく彼の耳底に大きく、はつきり聞えて來た。彼がぼんやりと目を開けると、納屋の入口一ぱいの明りの中に、眞黒い姿が立ちはだかつて仁王像のやうに見えた。彼は答へるだけの力もなく、ただその黒い影をちつと見つめてゐた。

「こら、出る。そこへ這入つてるんぢあない。こつちへ出て來い。」

仁王立ちになつた黒い影は、どなりながら、佩劍をがちやがちやと鳴らした。彼の目には、それが背後からの光で、きらきらと輝いてうつつた。併し、彼はどうしても動けなかつた。言葉も出せなかつた。彼はまた、がつくり頭を前へ垂れた。突然、恐ろしく力のある者が自分の襟首をがつちりと驚ぶかみにして引き立てるのを感じた。彼は、その巨大な力のままに、前後左右によろめきながら暗闇の中から、まぶしい程の明るみの中へ引きずり出された。彼はよろけそうになると、太い丸太棒のやうな力で支えられるのを感じながら、益々よろけた。

「こら、しつかりしろ。」

と言ふ太い聲と共に、彼は後へよろけ倒れようとした身體を前へひどく引つ張られて危く引き留められた。彼の左手をぐつと掴んで、彼を頭の先きから足の先きまでじろじろと眺めた巡査は、あきれかへり驚嘆しきつた聲で叫んだ。

「これは一體、何んだ。」

實際に、巡査の眼の前に、左手を掴まれてよろけ倒れさうにして立つてゐるものは、一人の間ではなく、一つの物に過ぎなかつた。然も、これ以上にぼろぼろな物は塵溜めの中を漁つても見つかりはしまいと思はれた。身體は至るところ襤褸の中からはみいで、全身は頭髪までも泥土と垢とでまみれ、その上、顔や手足には多くのかき傷があり、血がにじみ附いてゐるのであつた。それは全く、人間ではあり得ない。實際にぼろぼろになつた物である。

「うむ。これは、一體全體、何んでもんだ。」

と巡査はもう一度、うなるやうに言つた。それから、訊ねた。

「きさま、何處から來た。」

併し、このよろよろしたすりきれた、棒切れのやうな「物」は、何に一言も返事しないで、巡査に手を掴まれながら、やうまく立つてゐた。そうして、がだがたと震えてゐた。

「なあんだ、きさま、震えてゐるのか。寒いのか。」

と巡査は、嘲罵と憐憫とをこね混ぜたやうな調子で言つた。併しこの「物」は答へなかつた。巡査は少しいら立ち、聲を強めてまた訊ねた。

「きさま、何處から來たんだつて訊ねてゐるんだぞ。」

併し、この「物」は依然として、がたがた震えるだけで答へなかつた。

「おい、返事をしろ。聞こえないのか、何處から來たんだ。」

と巡査は更に聲を大きくして三、四度も、彼の手を引つ張つたり、彼の肩を突いたりして返事を促したが、この「物」は何一つとして返事をせず、きよとんとした顔で震えてゐた。彼は、瘧の發作にでもつかれてゐるやうであつた。

「おい、返事をしないのか。きさま、何處から來たんだ。言はんと、痛い目に會はせるぞ。」

と言ふと同時に巡査が彼の腰の邊りを思ひきり一つこづくと、この「物」はやうやく、何にか一言呟いた。

「何んだつて？ わからん。もつと大きい聲で言へ。」

「おら、岩手縣から來た。」

それは蚊のうなる程の小さい聲であつた。

「なに？ 岩手縣だつて？ きさまの國をきいてゐるんでない。何處の村から來たかつて言ふんだ。」

巡査の訊ねることは全く無理もない事であつた。こんな「物」がやつて來て都市の中をうろついてゐるのは、いづれ何處かの村から出て來たものでなければならぬことは巡査にも、よくわかつてゐるからであつた。

「おまへ、何處の村から出て來たんだ。」

と巡査は少し言葉の調子を和らげて訊ねた。

併し、どこかの村から出て來たのに相違ないこの「物」は、その他には何も答へなかつた。と

いふよりは、重い言葉の代りに、かすかに鼻をすする泣聲で答へるのであつた。巡査も、これには弱つた様子であつた。

「泣くな、泣くな、おまへみたくないものでも泣くことがあるのか。馬鹿、一緒に來い。」

巡査はそう言つて彼の、むき出しになつてゐる肘をつかんで、歩くやうに促した。併し、彼の足は動けなかつた。巡査に肘をつかれて、せき立てられるので、重い脚氣患者のやうに、やうやく一歩づつ、それも、一、二寸位、足を地面に引きずつて歩いた。そうして、やうやく二間ほども行つた時に、住宅の硝子戸が開いて、主人らしい人の姿が茶の間の電燈の光を背に、椽側に現はれ、どつしりと充分重味のかかつた聲で言つた。

「御苦勞様でした。納屋の中で火事でも出されると困りますし、それにこの間の強盜殺人事件もありますので、要心のためにお手數を願ひました、何んだか、ひどく腹がへつてゐるやうですね。今、握飯をやりますから、食べさせてやつて下さい。」

「いや、そんな御心配はいりませんよ。さあ、行くんだ。」

と巡査はすぐ彼をせき立てた。彼の足は半歩も前へは出なかつた。

「さあ、ぐづぐづしないで歩くんだ。」

と幾度も幾度も、巡査は彼をせき立てて、やうやく少しづつ歩かせた。

その間に臺所から、女中が片手に餘るほどの大きい握飯を掌の上へかせて、小走りに出て來た。暖い白い飯の握りから、白い、温い湯氣が立つて、女中の驅るのにつれて、暗闇と冷氣の中

に白い幾筋もの湯気が横に流れた。女中はそれを、乞食よりもひどい男の手の上へ乗せてやると恐ろしさに、後をも見ずに、臺所へ駆け戻つた。

男は驚きの目を見張つて、自分の右手の掌の上の大きい握飯を見つめた。古い干からびた樹皮のやうに固く荒くれ立つた掌にも、白い飯の温みがちつとりとしみ込んで来た。

「おまへ、お禮を言はんのか。物を恵まれたら、お禮を言ふもんだ。」

と巡査は彼に言つて、明るい椽側の方を見た。併し、そこには最早や人影はなかつた。

「さあ、歩くんだ。」

「巡査は彼の左の肘をついて促した。彼はじつとりとしみ込んで来た握飯の温みがやがて次第に冷えて行くのを感じながら、せかれるままに重い足をのろのろと動かした。彼が右手の掌の上に乗せたまま、それを何か尊い神佛にでも捧げるかのやうな姿勢で足を動かす毎に、ぼうつと白く見える握飯は、まるで、暗闇の中に、宙を歩く魂のやうであつた。

「折角、貰つたもんだ、冷めたくならんうちに食べたらいいだろう。」

巡査は彼の餓えを思ひやつてそう言つたが、今度も彼は返事をしなかつた。

「その握飯はおまへのもんだ、食べたらいいだろう。それとも腹がへつてゐないのか。」

と巡査はもどかしやうに言つた。併し猶ほそれでも大崎は答へようともせず、彼の握飯を捧げるやうに持つたまま、何か呟いた。恐らく彼の胸の最奥からにじみ出て、口の中のかすかな呟きとなつた言葉は、巡査のみならず誰の耳へも達しなかつたであらう。

「あれたちも、こんな白いご飯を食べてゐるかなあ。」

大崎は、握飯を恵まれた瞬間から、このことを思ふたので、この眞白い握飯にかぶりつく事が出来なかつたのであつた。彼には、養分のない、不毛の土に生え、いぢけて不具に育つた、そして白いご飯を食べられるやうにしてやると言つて、見も知らぬ遠い、大きな町へと離して出してやつた子供たちの姿が、この暗闇の中で一層よく見えるやうな氣持ちがしたのであつた。

大崎は巡査にせき立てられながら、やうやく近くの派出所まで辿りついた。そうしてそこで巡査にお湯を與へられ、眞中だけがまだ僅かばかり温みを残して、外は冷えて了つた握飯を貪り食べた。鹽味がつけられて、中には梅干までも入れられてあつた。彼はががつと、餓ゑた犬のやうに食べた。彼は、許可移民として開墾地へ入地して以來、こんなにもまい飯をかつて食べたことがなかつた。食べ終ると巡査に又、何かと訊ねられた。併し彼には、そのたたみかけて訊ねられることに對して、満足に答へる元氣がなかつた。姓名と年齢とをやうやく答へた位であつた。巡査は審しく訊ねることを断念したのか、やがて本署へ電話をかけて、彼をその方へつれて行つた。彼はよろける足を引きずつて長い街々と更に長い大きい橋を歩かされた。海に近い河口の橋の上は身を切るやうな冷い風が吹いてゐた。一時、餓ゑは思ひがけなく中斷されたが、襤褸をよとふてゐるに過ぎない身體は寒さにぶるぶると震えてゐた。彼は深く腕を組みその上に首をうなだれて身體を縮め、少しでも寒い風にふれるところを少なくしようとした。今では、大崎は心身共に眞性正味、そう言ふすりきれたルンペンの姿であつた。

「そんなに寒いのか。」

少し離れて、後から歩いてゐる巡査がそう訊ねて彼に近づいた。併し、彼はかすかにうなづくだけであつた。齒の根も合はぬ程、がたがた震えてゐた。巡査も黙りこくつた。寒いと訴へられ、でも、巡査としてはどうにも致し方がないことは百も承知なのだから。やうやく本署へ着くと、彼はそのまま留置場へ入れられた。そして長い夜と長い疲労と長い寒氣とが彼の全身をおし包んでゐたにも拘らず、彼は死のやうな眠りに引きずり陥されてゐた。翌朝興へられた辨當のうまかつた事は舌も痺れるかと思はれる程であつた。貪り食べた後で彼は又、白いご飯を食べられるようにと言つて、凶作地から遠くへ離してやつた二人の子供たちの事を想ひ出した。自分の腹のふくれた後で、この事を想ひ出すのはたまらなく切なかつた。

「あいつらだつて、どこかで、こんな白いご飯をたべてゐるべ。」

彼は當てのない事を考へて、自分をこまかし慰めた。

一度の食にありつくことは少くとも數日の生命を生きのばすことであるのを、切實に知つてゐる彼は、今、自らこの幸運にぶつかつてみると、何處をさまよつてゐるか知れない二人の子供にも同様の幸運が必ず恵まれてゐるものと信じて居たいのであつた。

「大崎常造。」

突然、彼は呼ばれた。併し彼はごろりと横になり、手、足を縮めて、敵に襲はれた蟲のやうに、まるくすくんでゐて、自分の呼ばれたのを知らなかつた。

「おい、おい、取り調べだ、起るんだ。」

彼は強くゆり動かされ、ぼんやり目を開ける間もなく引き起された。そうして彼は司法主任の警部の前に引き出された。彼がおぢおぢとして、やり場のない目をこの警部の顔に向けると、充血した鋭い眼と、黒ずんだ黄色い顔と、太い髭が、ぐつと自分を睨んでゐるのにぶつかつて、思はずあはてて、下を向いた。

「おまへは、大崎常造、三十六歳、つて言ふんだな。」

と警部は机の上の書類を展げながら訊ね始めた。

「これから、わしの訊ねることに、よく、正直に返事をするんだぞ、隠したり、嘘を言つたりするとおまへのためにならんぞ。」

大崎は無言のまま、うなづいた。

「おまへは何處から来た？」

「おら、岩手縣から来た。」

警部は、あやうく、ふき出す處であつたが、やうやく耐えて、につたりと笑つて見せた。

「いや、おまへの生れた郷里の事をきくのではない。この町へ来る前には何處に居たかつて言ふんだ。何處の村から来たかつて訊ねてゐるんだ。」

大崎は又、黙り込んで了つた。

「おまへは百姓なんだろう。」

警部はそう念を押すやうに訊ねた。大崎は深くうなづいた。

「そんなら何處の村で作つてゐたんだ。」

大崎はまだ黙つてゐた。彼は胸の中で全く、混乱して了つたのであつた。その困惑の色が彼の顔色にありありと現はれたので警部は突然となりつけて、おどかした。

「こら、どこの村だ。言はんのか。」

「舌辛村の方です。」

彼はひきつるやうな聲で答へた。

「舌辛村のどこだ。何號線だ。」

「おら、何號線だか知らない。」

「知らんことがあるか。おまへ、開墾移住の者だらう。」

大崎はおちけて混乱した顔でうなづいた。

「そんなら舌辛の何號線へ入つたか知らんことがあるか。」

「おら、本當は虹別の開墾地さ入つたもんだけど。」

「虹別村のか。」

警部の聲が、その瞬間に元のやうに和らいだので、大崎はほつとしてうなづいた。

「それがどうして舌辛へ行つたのだ。まるで方角の違ふ土地ぢあないか。」

「虹別の開墾地さ入つたけど、あそこは毎年毎年、凶作ばかりで、食つて行けないし、だから借

金が溜るばかりで、土地もみんな他人のものになつて了つたんです。あの虹別つて處は濃霧がひどくて、寒くて、作物なんか、ろくに育たない土地です。」

土地のことになると大崎は、自分の一番よく知つてゐることなので、重い口ではあるが、念によく、しゃべり出した。それに加へて、彼の一生の間に積り蓄へられた不平不満を丁度折りよく、ゆふべの巡査よりも偉さうな人の前で、お役人の前でしゃべることが出来るといふのは全く思ひがけない救ひのやうに思はれた。然も彼は今、自分が、此の都市の人々を不安の中に投げ入れてゐるまだ捕まらぬ、凶悪な強盗殺人未遂犯人の容疑者として一應の取調べを受けてゐるのだと云ふことは夢にも氣がつかかなかつた。だから、彼は何もかにも、ぶちまけて終ひ度かつた。

希望にかがやいて虹別原野へ許可移民として團體移住したことから、併し、入地以來毎年打ちつづいた凶作のために飢餓と借金とでうちのめされて、移住民として分配された土地を失ひ、最後の望みとして、虹別を夜逃げし、鶴の棲んでゐるといはれる釧路原野の新しい土地に盗み作りの危険を冒して入地をしてはみたものの、そこは、釧路濕原と呼ばれる程の泥炭地の一部で、丹頂鶴こそは、そこで蕃殖することの出来る土地ではあつても、作物は育たず、農民が生活の根をおろすには餘りに不毛の土地で、自然は彼等一家の死に身になつての勞苦にも拘らず、此處でも凶作と言ふ報酬を贈るだけで、今や彼は極端に苛酷で吝嗇な自然をただひたすらに恐れ、縮こまる一敗殘者と化して自然の手から逃げ遁れやうとする一疋の蟲けらのやうに、その土地から離れて來たことを告白したいと思つた。最初の虹別の開墾地では父親をなくし、文字通り舌辛村の新し

い土地では、丹頂鶴の飛翔するのを眺めはしたが、祖母、母親、女房、娘の四人を一年ほどの間に矢繼早やに失ひ、食物の缺乏に由る發育の障害から不具になつて了つた二人の子供を抱えて、不

毛の曠野の中に取りのこされたことを訴へたかつた。これは一體、誰の罪だと、叫びたかつた。

併し、彼には、それが出来なかつた。世の中の勞苦と自然の見えない戮殺的な力におびやかされて了つた彼は、體力と共に氣力も減して了つた。今の彼には、虹別開墾地から夜逃げをしたと言ふことと、舌辛の、誰の土地か知らない未墾の新しい土地へ無斷で入地して、盗み作りをしたといふことに對する怖れが、彼の全身のすりきれた氣力を抑へるに充分であり、容易であつた。それは、彼が一家を背負つて生きつづけて行くためには絶對に必要で、正當であると信じて、家族の反對を押し切つて斷行したことはあつたが、今それを警部の前で、今も猶ほ、同様に必要でもあり、正當でもあると主張する元氣は挫け去つて了つた。彼は苦しみ悶えながら、黙つてゐなければならなかつた。

「ぢあ、おまへは、虹別から夜逃げでもしたつてわけか。」

警部はひと言で彼を眞向ふからどやしつけた。

「そうして、舌辛の官有地へ入つて、隠れて盗み作りしてゐたんだらう。」

大崎は最早や恐れ入つてしまつた。ぐうの音も出なかつた。

「だから、そんな天罰が當るんだ。夜逃げだつて決していい事ぢあない。澤山の債權者へみんな損害をかけるんだからな。だが、お上の土地へ無斷で入つて盗み作りするつてことは、お上の

ものを盗むことなんだ。これは夜逃げなんかよりも、もつと悪い、大きい罪だ。だから、みんなかうなつたのもみんな天罰だ。みんなおまへの罪だ。」

大崎はこの時、急に胸の中がぐつと、こみ上げて来る熱いものを感じて、思はず知らず、聲を張り上げて叫んだ。

「違ひます、違ひます。太陽さんは始めからおらたちを生かしては下さらなかつた。生かしてやらうとして下さらなかつた。おらたちには、ほんの僅かばかりの食べ物も下さらなかつた。ほんの僅かばかりの、やうやつと食べて行くだけの土地も當てがつて下さらなかつた。死ぬほどの思ひをして開墾地さ入つても、その土地は、幾年もたたぬうちに、いつの間にか誰か、よその人に奪り上げられて了つた。やつとのもので新しい土地を見つけても、そこは作物の育たない荒地や痩せ地だ。作らうとしても、出来ない土地だつた。夜逃げも、盗み作りも悪いこつたけど、年寄りや女、子供らをつれて原野を歩き廻つた時の苦しかつたこと。荒地を耕して作つても、ひどい凶作で何も出来ず、その上、みんなに死なれ、不具な二人の子供とおらだけが後に残されたんで。」

大崎はそれだけ言ふと、ぼろぼろこぼれ落ちる涙を兩方の掌で、代る代る拭きながら言葉をうち切つた。

「それで、その二人の子供をどうした。」

と警部は何かしら兇惡な豫感にでも打たれたやうに、屹つとなつて訊ねた。

「おまへ、その二人の子供をやつたな。」

大崎は不審な顔をし、じとじとに涙でぬれた目を警部の顔にそそいだ。

「子供を殺ろしたろう。」

と警部は鋭で、一と打ちにするやうに、真向ふから劇しい言葉で大崎をどやしつけた。

「馬鹿こかないでけれ。おら、これでも親だ。子供を殺すなんてこと、夢にも考へたことはいだ。」

大崎の言葉にも、態度にも、今度はむしろ毅然として、警部を輕蔑し、冷笑するやうな調子が現はれた。

「おら、これでも、子供を殺すやうな親ではない。」

大崎はきつぱりと言つた。

「ちあ、子供たちはどうした。」

と警部は、せき込んで訊ねた。

「おらはもうこのまま死んでもいいけど、せめて子供らだけには、こんな苦しみをさせたくないと思つた。それで、おらたち親子三人していつまでも、かうしてはゐられない。冬が來たら、みんな食ふものがなくなつて死ななければならぬ。だから、お前らとわかれる時節が來たと言つてきかせた。子供らにも、そのことが、よくわかつた。わかるのは當り前だ。それで土地を離れて、劍路へ出た。家財道具をみんな賣つた。七圓ほどの金を持たせて、二人を小樽まで汽車に乗

せてやつた。どこへでも勝手に行くがいい。大きな町なら乞食をしても生きて行けるだろうからと思つたから。今頃はきつと、何處かで白いご飯を食べてゐる。」

「馬鹿。おまへは自分の子供を乞食させていいと思ふのか。そんな親が何處にある。」

「しかたがない。それでも、僅かばかりの馬鈴薯や南瓜や唐黍を食べてやつと命をつないでも、この冬は生き通せるかどうかかわからないから。乞食したつて、生き通せるなら有難いことだと、おら、そう思ふ。」

警部にはもうこれ以上、取調べる必要も興味も消え失せた。こんな男に、強盜殺人未遂なんかと言ふ大罪の嫌疑をかけるのは、最早や滑稽であつた。この男がその身體と同じやうにその全生涯と全精神とを、泥土と垢とに黒々とまみれ果てさせ、無数の掻き傷から血がにじみ付き、ぼろぼろな一つの廢物として不倖不運な貧農層の一代的存在を表はすにしても、この都市の一隅に、不意に起つた強盜殺人未遂の犯人よりは遙かに興味の無いものであつた。このやうな百姓はその邊りの開墾地にさらに見なれてゐるのであつたから。

「そんな血と土だらけになつて、日が暮れてから他人の納屋へ、のそのそ這入り込むから、こんな手敷をかけるんだ。あつちへ行つて、待つてゐる。」

警部は看守に目くばせした。看守は彼を引き立てて、また留置場へ連れ戻した。やがて、晝の辨當が當てがはれた。夜前から三度つづけて飯にありついたことは、夢にも見られぬ幸運であつた。

其の日の午後、大崎は又、看守に呼び出されて別な巡査の前に連れて行かれた。此の巡査は前の警部よりも、ずつと年長だが、下級のやうであつた。

「おまへの子供は秀造とお松と言ふのか。」

と巡査が書類を展ろげながら訊ねた。大崎はびつくりしてただ「はい」と答へただけで、何かしら氣味悪るやうに巡査の顔を仰いだ。

「よろこべ、おまへの子供たちは小樽で見つかつたぞ。」

と巡査は言つた。併し大崎はさほど嬉しそうな顔をしなかつた。自分から、切ないながら親心で、凶作地から離し出してやつた子供たちを、無斷で家出したか、悪い者に拐かされたものとも思つてゐる巡査の言葉がむしろおかしかつた。

「やつぱし、小樽まで行つたか。」

と大崎は心の中で獨りで合點してゐた。小樽でなら乞食しても食べて行かれる。戻つてなんか来るな、と心の中で子供らに言つた。其の他の事は何んにも知り度くなかつた。

「おまへの子供らはな、小樽まで行つたが、何處をあてもなく、市内を徘徊して、とうとう町はずれの本田澤と言ふ百姓町に出た。そうして二日間、その近くの赤岩と言ふ山の落葉松林の中で野宿して、それから青い顔をして本田澤の駐在所の前を通つた處を折りよくその巡査が見つけてくれて、事情をきいた處が餘り可哀想なので、大いに同情して本署へ連れて行つて保護を加へてゐるんだ。」

と巡査は詳しく事情を言つてきかせた。

「保護を加へてゐると言ふと、おらのやうにされてゐるんですか。御飯を食べさせて貰つてゐるんですか。」

と大崎は巡査の顔を仰いで言つた。

「そうだ。そうして今、引取人を探してゐるんで、小樽署から紹介が來たのだ。舌辛村駐在所ではお前が家財を持つて行衛不明になつてゐるとわかつたので、こちらへ照會が來たのだ。」

大崎は啞然とした。目に見えない、この至れり盡せりの連絡が鐵の網の目のやうに張りまはされてゐて、自分たちはどうしてもそれにひつかからないでは通られないやうに感じた。

「おまへは子供たちを引き取るんだらうな。お前は本當の親だから。」

と巡査は柔い言葉ではあるが、押しつけるやうに言つた。

「いいや、いいや、どうか、そのままにしておいて下さい。おらには引き取ることが出來ないから。おら、養ふこと出來ないから。」

大崎は、ひたすら歎願するやうに言つた。大崎の言ふことは、すぐ巡査に呑み込めた。このぼろぼろになつた、今にも野垂れ死しようと思ふ男に更に二つの生命を預け護らせることは到底出來ることではないのは明らかであつた。併し、巡査は尙ほふと、この町はずれに巢くふてゐる幾組もの親子連れの乞食のことを思ひ出して言つた。

「乞食しても、親子三人位は生きて行かれるぢあないか。水入らずの親子三人でゐられたら、

乞食したつてその方がずつと楽しいぢあないか。」

大崎にとつては、そんな楽しみなんかは考へられなかつた。郷里くわににゐる時からでも、親子が揃つてゐるからと云つて、それで楽しかつたやうな月日と暮しを彼は一度も味つたことがなかつた。食ふものでも満足に食へたなら、そう言ふ楽しさは在り得やうかも知れぬが、併し親は子のために、子は親や兄弟姉妹のために食ふものをひどく減らして、やうやく生きて行かねばならぬ者の間には、どんな楽しみもあり得ないことを貧窮のどん底で嘗め盡してゐるのであつた。この上に、まだ子供らと一緒に乞食をしると他人は言ふのだ。然もその乞食をしてゐる間の怖ろしい餓ゑは子供らを遠くへやつてしまつてからこの方、この町の隅から隅までうろつき廻つた擧句の行き倒れで明らかであつた。乞食をしたつて餓ゑはつきまとふのだ。彼はふと或る日の出来ごとを、ありありと目に浮べた。彼がよろよろと町を放浪してゐると、かなり賑やかな通りから曲つた小路の入口に澤山の人だかりがしてゐるのに出會つた。何氣なく近づいて人の群れの背後から、そつとのぞいてみると、大きい芥箱かゐばこに半分身體を突つ込んだまま、一人の乞食が野垂れ死してゐるのであつた。彼は自らさつと血の氣のひくやうな感じて、急いで其の場を逃げたのであつた。その時以來、急に死が用捨のない、大きな手を展げて、彼の行く途にいつも、どつかりと立ちふさがつてゐるやうな氣持に襲はれるのであつた。芥箱かゐばこをのぞくと、いつも其の中に死が待ち伏せてゐて、彼を否認なしに、その中へ引きずり込むやうな氣持がした。だから、乞食になれと言はれると、芥溜かゐばこの中へのめり込んで死んで終へと言はれるやうな氣持がして、ぞつとした。子

供らには乞食をしても生きられるとは言つたが、それを自分に言ふ元氣はなくなつた。

「おらは、もうこの冬には死ななければならぬかも知れないけど、おら、死にたくない。」

大崎はそう言つて、めそめそと泣き出した。

「よしよし、死ななくてもいい。誰も、おまへに死ねなんて言つてゐない。」

と巡査は持て餘し顔に彼を慰めた。そして話頭を轉じた。

「おまへの兄弟が、誰か富山縣にゐるか。そう云ふ調べになつてゐるんだが。もしそうなら、つまり子供らの叔父にあたるわけだから、その方に引きとつて貰へばいいんだが。」

巡査は書類をめぐり尋ねた。

「おら、知らない、そんなものゐない。」

「知らないと言つたつて、お前の兄か弟かだぞ。兄弟が何處にゐるか位は知つてゐるだらう。」

「でも、小さい時分に別れて了へば、わかるもんでない。」

大崎は平然として答へた。

「では、膺振うづに親類がゐるそうだな。そこはどうだ。」

「遠縁に當るもんがゐたつてことだけど、あてになんかならない。」

「そうか、おまへの方で、見限つてゐる位の者なら、あてにはなるまいなあ。ここにも、そう書いてある。子供の引取を交渉中だが、あてにはならないつて。」

「旦那、どうか、子供らをそんなところへやらないで下さい。行つたつて食はせて貰へる程の

處ではないから。そんな慮さ、やる位なら舌辛シヨウカクにゐるも同じだ。」

「そこも、やはり、百姓なのか。」

「そうです。」

「子供らは少しは畑仕事に働けるんだらう。」

「少しはおらの手傳ひしたけど。」

「そんなら、親類の處で少し働いたら食ふだけは食はせてくれるだらう。」

「でも、この凶作つづきでは、働いたつて食べられないし、それに子供たちは、二人とも身體が弱いから。」

大崎は、子供たちが、鈍問で不具だとは言ひ得なかつた。

「そうか、では、どうにもならないな。困つたものだ。でも、何とかしなければならんな。」

まあ、あつちへ行つてゐれ。」

巡査はそう言つて書類をまとめて立ちかけたが、机の上の新聞の綴り込みにふと気がついて、また腰をおろした。

「子供たちの寫眞を見せてやろうか。」

巡査はそう言つて、新聞をめくり、或る頁を開け、彼の方へ向けて見せた。

「あつー。」

大崎は思はず聲を擧げた。二人並んで胸の邊りまで寫し出されてゐる子供らの顔は僅かの日數

の間に確かに見違へる程、肥つたやうに思はれた。彼はこみ上げて来る喜ばしさに、涙をぼろぼろこぼして泣き出した。

「よかつたなあ、おまへたちは、小樽さ行つて助かつたなあ。白い米のご飯が食べられたべ。そうやつて、大きくおがれよ。」

彼は、嬉し泣きの中に、固こばる舌を一層引きつつて、そう叫んでゐるやうな心地がした。彼の眼は、手の甲や掌で拭いても拭いても、涙で消えなかつた。

「お前の子供たちはかう言つてゐるそうだ。讀んでやるから、よくきいてゐろ。」

巡査は新聞の綴込みを取り上げて、子供の言葉をまねるやうに讀みきかせた。「おれたちのお母や、祖母や祖父や大祖母や妹たちは虹別ニリベツと舌辛シヨウカクで死んで了つて、お父と三人で暮してゐたよ。おらたちはお父と三人で、凶作で食はれなえだ。唐黍や南瓜や馬鈴薯カボチャを食つてゐたけど、お父はもう冬が来るのに、ぐづぐづしてゐるとみんな死なないばならないから、おまへたち二人して小樽さ行つて白い米のご飯を食べて、お父の行くのを待つてゐれつて、おらたちを出してよこしたよ。お父は今頃一人でもどうにもなんなえだらう、生きてゐるかなあ。」巡査は綴込みを机の上に置いて言つた。「これがおまへの子供たちの言つてゐることだよ。そうして、白い飯が食へるの

で、いつまでも警察の保護室にゐたいと頼んでゐるそうだ。」

「それは此處と同じやうな所ですか。」

「どうか、いつまでも、そこさ置いてやつて、下さい。日に握飯一つ宛やつて下されば、生きて行けるんです。」

大崎は急に前にのめり、膝をついて両手を机のふちに向け、泣き喚びながら哀願した。

「よしよし、あつちへ行つて静かにしてぬれ。」

巡査は手を舉げて、看守に合圖をした。看守は背後から彼を引き起して、泣きしやくりながら、とぼとぼと歩む大崎を追ひ立てるやうに連れ去つた。

大崎は新聞に出てゐた二人の子供の寫眞がほしくてたまらなくなつた。それで廊下を歩いてゐる間に、彼は看守に頼んだ。

「さつきの新聞さ出てゐた子供らの寫眞をおら欲しいもんだが、旦那さ、頼んで下さい、どうか頼みます。」

「あの新聞なら、わしの家でも、とつてゐるから、切り抜いて置いて、あんたが此處を出る時に上げるよ。」

と看守は傍ですつかり話をきいてゐて、この憐れな一人の父親に同情したせえか、今までとは全く違つた親切な返事をした。

「本統にどうか頼みます。おら、有難く思ひます。」

と大崎は繰りかへして禮を言ひ、頼んだ。そうして彼は嬉しそうに、いそいそとして留置場の整氣な部屋の中へ入つて行つた。間もなく日が暮れて、寒い、暗い、長い夜が來た。そうして翌

朝彼は呼び出されて、小樽へまでの汽車賃を恵んでやるから小樽へ行つて子供と一緒に暮せと言はれた。彼は不審げに警部の顔を見つめてゐると、警部は彼に五圓札一枚と五十錢銀貨一つ握らせた。そうして改めて重々しく言つてきかせた。

「放免されたんだから、出て行くがいい。小樽の警察へはそう言つてやつて、お前の行くまで子供を保護して貰つてやる。すぐ小樽へ行くんだぞ、この町で、またぶらぶらしてゐると、あやしまれるからな。早く、小樽へ行くんだぞ、わかつたか。わかつたら、行つていい。」

そう言つて警部はさつさと向ふの部屋へ行つて了つた。彼がわけがわからず、まだ、ぼかんとして突つ立つてゐると、看守が彼に近づいて來て言葉をかけた。

「こつちさ來なさえ。出口はこつちだから。」

看守は先きに立つて歩き出した。大崎は看守の後について廊下へ出た。出口の處まで來ると、

看守は立ちどまつて彼に言つた。

「おまへさん、此處へ來るとき何んにも持つてゐなかつたな。」

大崎はただ、かすかにうなづいた。

看守は胸のかくしから、丁寧に折り疊んだ新聞紙の切抜きを取り出して大崎へさし出した。

「これが、子供たちの寫眞だよ。あげるから持つて行きなさえ。さあ、氣をつけて行きなさえ。自由な身と體になつたんだから。」

看守は自分で言ふだけのこと言つて、大崎のお禮の言葉なぞ耳にも入れずに、さつさと建物

の中へ消え去つて了つた。大崎は新聞紙の切抜と金銭とを右手にしつかり握つたまま人通りの多い往還の中へ、方角もきめずにおぼおぼと歩き出した。

留置所で過して出て来ると、ただ二日ひと晩で町はまるで變つて見えた。目に見えるほどの木は裸になり、灰黒色の空が町の上を低く覆ひ眞晝頃と言ふのに、早くも黄昏のやうであつた。乾いた冷たい風が街を吹き通しに吹き、落葉と埃芥が到るところに吹き溜まり、その上に降雪が凍つて、こびりついてゐるのが見られた。彼は留置場で晩と朝と晝の三食を與へられたので、やや元氣を取り戻したので、ひどい吹雪を思ひ出すことが出来、一晩の内に眞冬が來てゐることを、はつきり知つたのであつた。警察署は丘の上にあつたので、そこから見下ろす街と川と海とが彼には不思議な新しい町のやうに思はれ、大きい石橋につづいて、すつと向ふに延びてゐる通りの端に停車場の建物を小さく眺めた。彼は警部に言はれたやうに、汽車に乗つて小樽へ行き、子供と一緒に暮すことを、いふにいはれぬ好運であり幸福であると考えたことには相違ないが、併し丘の上に背んで遠くの停車場を眺めてゐる内に、「小樽へ行つてからどうなるものだらう」といふ不安な考へが浮んで來た。「同じことが起るに違ひない。小樽の方は此處よりは少しは景氣がいいかも知れないが、子供たち二人を抱えて、何が出来るだらう。」

彼はそう考へると、今更小樽へ行くことに氣が進まなかつた。彼には子供たちと一緒にゐること

とは自分が生き延びることの困難となるばかりでなく、寧ろ子供たちに不幸なやうに思はれるのであつた。彼には警部の言葉が強く耳底に残つてゐた。それは、親があるのに、孤兒院へはやれぬといふ言葉であつた。彼はこの言葉の裏を考へずにはゐられなかつた。「もし親の自分が居なくなつたら、いつそのこと死んでしまつたら、子供たちは孤兒院へやられて、そこで白い御飯も食べられ、温い着物も着せて貰はれるに違ひないのだ。そうして子供たちはよく育つてゆくのだ」と考へた。この考へはすばらしい魅力を與へた。「どうせ、おらの身體も命も、もう役に立たないのだ。おらには生きて行く力もなければ、まして子供たちを仕合せにしてやることも出来ないのだ。おらが子供たちの處へ行けば、かへつて子供たちは不幸になるのだ。だから、おらが死んでしまへば子供たちは仕合せになるのだ」と彼は思ひ詰めた。そうして彼の陥入つた境地から言へば、この考へには隙もないほど筋が通つてゐた。彼の考へを思ひかへさせる藉口が全くなかつた。彼は今や、父親である自分の死が子供たちに不幸どころか、幸福を齎すことなのだと云ふ恐ろしい結論に對して、何かしら、非常に大きい善を爲すかのやうに、楽しく、心を慰めるもののあるのを強く感じ出した。死ぬことは、恐ろしいことではなく、甘い、楽しいことのやうに思はれた。

彼は夢遊病者のやうに、丘を下つて街も通り郊外の鐵道線路の方へ歩いて行つた。彼は大きい橋を渡つたことと、街を通つたことだけは覚えてゐるが、郊外の鐵道線路に近い、ある木蔭にしがんでゐる自分のことは、まるでわからなかつた。線路を出た汽車が、やうやく速力を出して

眞直な線路を、まつしぐらに走つて來るのであるが、それが速いやうでもあり、一點に停つてゐるかのやうに遅くも思はれた。それを彼は不思議そうな顔をして、ぼんやり見つめて、木蔭にしがんでゐた。汽車は、ごうと言ふ轟音の他に、水を浴せかけるやうな、さあと言ふ音と共に近づいた。彼はふと急にひきつけられるやうな魅力を感じ、立ち上るとなんの躊躇もなく線路へ飛び込んだ。けたたましい汽笛が耳許で鳴つた瞬間に、暗闇に、物懐い電光が飛んだと思つた。

彼が蘇生の息を吹きかへした時、右足の先端にひどい痛みを感じ、腰から下は地べたへ釘付けにされて身動きの出來ぬ重さを感じた。その他には、周囲が急に騒々しくなつたり、急に靜かになつたりする感じが、ただ空氣の緊しまつた壓迫感と、その緩んだ懈息の感じとなつて、胸の重苦しさを感ぜさせ、肉體そのものの苦痛と感覺の苦痛とが、ちぐはぐに感じられる状態に在つた。そうして彼が本當に自己を意識し始めたのは、それから、かなり経て、近所の病院へかつき込まれて應急の手當を加へられてからで、それまでの間に彼は幾度となく、意識を失つて、朦朧となつたり、喚き立てたり、最後の息を引きとつたのではないかと、あやしまれたり、とても駄目だらうと言はれたりして、生と死との境界を幾度となく彷徨しつづけてゐたのであつた。やうやく彼が自己と周囲とを見分けることの出來た時、彼は灰白色の壁にかこまれた病院の一室に數人の患者と同室で、寢臺の上に寝かされてゐるのに氣がついて、彼は始めて、助かつたんだと思つた。併し、彼にはその喜びもまだ感じられなかつた。彼はただ呆けてしまつたやうに、自分の頭が、ぼうつとしてゐることと、右足の先きが痛むことを感じるだけであつた。腰はまるで抜けて

しまつたやうな重い感じであつた。彼は、うつつになつたり、頭や體の節々が痛んだり、たまらなく眠くなつたりして、自身のゐる處も、時間も知らずに過した。

彼が後で看護婦から聞かされた處によると、右脚がぐぢやぐぢやに轢き碎かれてしまつたので、生命を助けるためには、思ひきつて腿のところから、切斷してしまはなければならなかつたこと。その手術は、既に出血多量のため危険ではあつたが、手術がうまく行はれたので、成功し、やうやく一命をとりとめたこと。傷がすつかり癒着してしまへば義足でそう不自由なしに歩けるやうになること。市役所と警察との取計ひで、行路病人の施療患者として全癒までの手當をして貰はれると云ふことであつた。彼には、右脚が切りとられてしまつたと云ふことが最も大きい驚きであつた。併し彼には信じられぬ感がした。切斷されてしまつたといふのに、彼は右足の先端に、まだ足がついてゐると同じやうに痛みを感じるので、まだ右脚がついてゐるとしか思はれなかつた。

施療患者としての彼に對する給食は勿論、充分のものではなかつたが、併し生存のどん底で飢餓にさまようてゐた彼には、たまらぬ食慾を誘ひ出した。傷口と元氣の恢復も早かつた。それは反面に彼が如何にひどく惨めな、虐げられた生存のどん底に投げ出されて肉體が最早や枯死しようとしてゐたかを證明するやうなものであつた。併し、彼がやうやく床の上に取り上げられるやうになつて、左脚の半分にも及ばぬほど短くなつた右脚を、厚い繻帶の上から視た時、始めて本當に自分の惨めさを知つて、大聲を上げて男泣きに泣いたのであつた。彼の心が、これから來る生存

への不安と恐怖とに次第に重く暗くなつて行くに反して、傷は次第に癒つて来た。約一ヶ月半の病院生活で身體は弱々しくはあるが、やや肥えて来た。退院の豫告が下された。それから間もなく、警察と市役所から巡査と吏員が病室の彼の處へやつて来た。そうして、傷が全治したから、これから退院すべきこと、退院と共に、小樽へ行つて、育成院を訪ね、子供たちを引き取つて自身で養育の道を立てるべきこと、もう二度とこの町で、うろろうしたり、お上に厄介をかけるやうな馬鹿氣たことをしてはならぬこと、所持品として警察で保管して置いた着物と、金とを渡すから受取るやうにとのことを、巡査と吏員とが、交る交る繰りかへして言つた。そうして彼は一つの風呂敷包みの中から、古着一枚と、紙に包んだものを差し出された。

「これは、おらの持物ではないと思ひますけど。」

と大崎は、怪訝な顔をして恐る恐る言つた。

「まさか、裸で退院も出来んだらう。それにおまへの着物は、すたすたに裂けて、血だらけになつてどうにも、しようがないから始末して、その代りに、これを見つけてやつたんだ。」

と巡査が言つた。

「ありがとうございます。」

と大崎は泣き聲で言つた。

「それから、これは金で、六圓五十錢ある。新聞の切れ端で包んであつたが、新聞紙はよこれて破れてしまつたので。別な紙に包んで置いたのだ。中味には絶対に間違ひはない。」

と巡査が言つて、紙包みを出した。大崎はそれを受け取りながら、もじもじして言つた。

「これを包んであつた新聞の切れ端は、どうしたでせう。」

「捨ててしまつたよ。」

「ああ、あれは、おらの大事な新聞で、子供たちの寫眞があれに出てゐたのです。」

と大崎はひどく、落膽して言つた。

「それは知らなかつたが、何せ、血がついてひどかつたからな。その札にだつて血がどつぶり附いてゐたんだが、洗つて綺麗にして置いたんだ。」

と巡査が言つた。そう言はれて見ると、五圓札は、變に硬ばつて汚なかつた。

「小樽へ行けば子供たちに會へるんだから寫眞はええじやないか。」

と吏員が言つた。大崎は、うなづくよりほかはなかつた。

大崎は寢臺からおりて、二人の見てゐる前で着物を着た。併し歩けないのだ。同宿の患者の二、三人と看護婦に簡單に挨拶をして、びよんびよんと飛びながら、壁や何かに手をかけて、二人の後について病室を出た。彼の歩けないのを見て、巡査は彼を玄關で少し待たせて置いて、矢木丸太の棒ぎれを見つけて来た。大崎はそれを、きこちなく杖について警察署へつれて行かれた。そこでも、かなりまたされて、上役の警部の前につれ出された。そうして、繰りかへし繰りかへし、子供たちのある小樽の育成院へ行くのだぞと言ひきかされた上で放免された。彼は、丸太棒に全身の力を入れて、のろりのろり自分の身體を運ばねばならぬ、この新しい歩行の術に氣

をとられ、全身びつしより汗をかきながら、冷い風が吹きさらす、凍った町を停車場の方へ動いて行つた。病院に一ヶ月半を過す間に、正月はすぎ、街ばかりでなく、空も、風も、海も河も山も樹木も冬になつてゐた。

彼は何處へ行くのであらうか。彼は自分でも停車場の方へ向つて、こつつんこつつんと新しい木の脚に全身を支へて動いてゐることを知つてはゐるが、彼の氣持は小樽の子供たちのもとへ行かうと云ふ決心に迄は達してゐないのであつた。自殺を企てた手前にも、子供たちの處へ行く氣持は起り得なかつたのだから、不具になつてしまつた今としては、猶ほ更のことであつた。三人になれば、三人一緒に餓死にするより他はないが、別れ別れになつて、ことに子供たちが全く孤兒だとなれば、あの二人は心配なく生きて行かれるのだ。この考へは、あくまでも大崎の頭にこびりついてゐた。それは間違つた考へ方かも知れないが、今の彼にはこれが最も確實で且つ眞實のことと考へられるのであつた。「おらは、どうしても子供たちの處へ行つてはならんのだ。身を隠してしまはねばならんのだ。そうすれば、あの子供たちは、安心して育てて貰はれるのだ。」

大崎はこんなふうにならうに考へながら、歩いてゐた。その日から始まつた新しい歩き方になれぬので、やたらに力を入れるため身體が勞れ、病後の急な動きで時々、目まひがするのであつた。それで、途中で横町にそれ、路傍に積まれた木材の上へ腰をかけ、足を伸ばした。警察で心配してくれた古着の乗馬ズボンの右の方が、ぶらぶらしてゐるのに、左の方は脚が、にゆつと長く出て置

粉靴を履いてゐるのが、かへつて無氣味であつた。彼は木材の上に腰をおろしたまま、ぼんやりと随分暫らく休んでゐた。併し、そうしてゐる内に、これからどうすればよいのか、心配になつて來た。懐中には五圓五十錢あるので、十日位ひ食べて、寝ることは出来るが、この身體ではそれから先きのことが全く見當がつかなかつた。彼は長いこと、ぢつとそれを考へて、凍りついた雪路を見つめてゐた。そうしてふとバタヤになつて、その仲間に入れて貰はうと云ふ考へが浮んだ。彼はまた永いこと、その考へを色々と思案してみた。野良犬のやうに、芥溜をのぞいて掻き廻す様子は、いやでたまらぬが、併し今となつては、選り好みはしてゐられないのだ。彼は自分で本當に氣がついた時には、既に一匹の飢ゑたる野良犬と同じだつたのである。彼は、とうとうその仲間へ入れて貰う氣になつて、木材の上から身體を起し、丸太棒をついて、歩き出してゐた。彼は大きい石橋を渡つた。それから、左の方へと曲り、河の左岸に沿ふて丘の裾を廻り、いつか、歩き廻つて覺えてゐた俗に「サムライ部落」と呼ばれてゐる世の廢殘者の群れの雜然と巢食ふてゐる窪地へやつて來た。そうして、窪地一面を埋めるやうに立ち並んでゐる、傾いた破れ小屋のひとかたまりを見た時、彼は自分の行くべき處へ、とうとう來着いたと云ふ、寧ろ安堵に近い氣持を感じた。併し、この全部落に全く見なれぬ侵入者が來たとばかりに、と或る破小屋から、黒い犬が飛び出して來て、彼に對して吠えつづけた。

それは午前のこと、窪地の部落は、ひっそりとしてゐた。大崎は吠え廻る犬を避けながら部落へ入つて行つた。と或る破れ小屋から、一人の老婆が、のっそりと出て來た。

「何んしに來た。餘り犬が吠えるから誰かと思つた。」

と老婆は口をもぐもぐさせて不機嫌に言つた。

「おら、ここの仲間さ入れて貰ひ度いと思つて來ただけど。誰に頼んだらいいか。」

「そんなら、部落の世話人さんさ頼んだらええべ。でも、錢んこ持つてるか。」

「錢なんか持つてゐないから來たのさ。」

「それなら、本當だとも。でも、入るのには、少しは錢んこいるからなあ。家賃が、一番安いとこで、月に四十錢、下宿なら月に十錢いるし、引越して仲間入りには、焼酎一升買はんばならんからなあ。でも、それがなければ、世話人さんから前借りして、あしたから稼いだので、返へしてもええことになつとる。さあ一緒に來いばええさ。おらが世話人さんの家さつれて行つてやるから。」

老婆は氣味の悪いほどあいそよく、大崎を奥の方の破れ小屋へ連れて行つた。

「世話人さん、新しい仲間入りが一人來たよ。今夜は焼酎一つばい飲めるね。」

老婆は破れ戸を、がたびし開けて入りながら、そう言つた。大崎は老婆について入つたが、どう挨拶してよいか、全くどきまぎした。老婆は後をふり向いて、これが世話人さんだと言つて、何んとか挨拶をせと云ふ様子をした。大崎は、醬油色に變つた破れ疊の上に、爐に向つて胡座をかいてゐる藪にらみの五十歳位の男に頭を下げて言つた。

「おらは、大崎常造と申します。開墾百姓に入つたけど、駄目になつて、こんど仲間さ入れて

貰ひたいと思つてます。どうか、宜敷、お頼み申します。」

大崎は、丸太棒につかまつたまま、びよこんと頭を下げた。世話人と云ふ男は、だまつて、うなづいた。それで濟んだと老婆は言つた。大崎は簡単に部落入りを許されて、日に十錢で、老婆のもとに下宿することになつた。それには老婆の口ききが役立つたのであつた。大崎としては、脚が不自由で困るだらうし、老婆の方では、彼を用心棒代りにする氣であつた。そうして晩にいづれ、仲間入りの顔合せをさせるから、それまで、老婆の方へ行つてゐれと云はれた。大崎は老婆に伴はれて再びその小屋へ戻つた。それは赤錆の古亞鉛と古板切れと葎で圍まれた小屋で、彼が曠野で雨露を凌いだ堀立小屋よりも、もつとひどい寝ぐらに過ぎなかつた。それでも大崎には、生きる途が與へられた安堵が湧き出て來て有難かつた。老婆の小屋に入ると、ちよろちよろと燃えくすぶつてゐる古い破れ鍋の爐に、にじり寄つて身體を暖めた。

老婆は大崎の不具の脚を見て尋ねた。大崎は鐵道自殺をやりそこなつたとは言はずに、去年の冬、鐵道の雪除け人夫に出てゐて、大吹雪の日に、ラッセル除雪機關車が走つて來るのがわからず働いてゐて、はね飛ばされてやられたと言つた。それはよくあることなので老婆は大いに彼に同情した。老婆は、そんな大怪我させられたのだから、お上から澤山、お金を貰つたらうと尋ねた。大崎は、少しは貰ひましたが治療とこの不景氣に仕事がなく、すつかりなくしてしまひ、それでこの冬はどうにも、しかたがないので、ここへ厄介になり來たのだと物語つた。

「でも、その脚だば、町を方々歩いて屑を拾ふのに困るべさ。棒について歩くだば、まるで兩

手が、ふさがるでなあ。肩拾ひだつて一人前の仕事をするには、一人前の身體からだがいるでなあ。肩拾ひもこれで、馬鹿にならん力仕事だもの。」

と老婆が言つた。大崎は、そう言はれて、町で見かけたそう云ふ仲間の様子を思ひ浮べてみた。古い麻袋に一つばい詰つた肩を背負ひ、古ひぼて籠を手に下げてゐる姿を思ふと、成る程、自分にはそんな仕事はとて出来ないう事がすぐわかつた。併し、どうすればよいか、うまい考へは浮ばなかつた。

「手をあける工風くふうしなければ駄目ださ。短い方さ、小さい座布團でもあてた棒で足をこしらへて、くつつければいいべ。そうせば、片方の手だけ使へば、別の方の手があくから。どうせ、やられるなら、左の方がやらればよかつたのになあ。それなら、右の手があげられたのに。なんぼ、ぼんやりこいてゐたもんだかさ。晩方には、部落の衆が戻ると、きつと、丁度いい座布團の拾ひ物があるべから、それを分けて貰つてやるさ。それで棒の脚を拵へるといいさ。」

と老婆は言つた。大崎は自分の身體を死から救ひ、また苦痛から救つてくれた醫者よりも、この老婆に對して非常な感謝の念を深くした。醫者は自分を救つてはくれたが、つまりは自分に一層悲惨な運命を無理押しに押しつけてよこしたやうなものであつた。併し、この老婆は、このどん底の、一切の救助のない生存のうちに、尙ほ生きる途を與へてくれるのであつたから。その日の晝に、彼は、老婆が芥捨かゑの穢土の中へ種子を蒔いて種つたのだといふ、小さい南瓜の、ゆでたのを御馳走になつた。彼は本當に生きかへつた心地がした。

夕暮時になると、晴へ戻る鳥の群のやうに、窪地の部落の仲間たちが、黒い姿で、思ひ思ひに、だまり込んで歸つて來た。そうして、めいめいの、古袋や古手籠やバナナの古籠なぞからあふれてゐる色々様々のものを取り出して、荷捌きを始めた。老婆は一寸行つてみて來るからと言つて一人で、部落の小屋の前を通りながら、「小さい座布團のやうなものはないか。あつたら、値よく買うから」と言つて觸れ歩いた。その日の拾ひの中には、そんな物はなかつたが、前に拾つて置いたものがあるから、五十錢なら賣つてもいい」と言ふ者があつた。老婆はその薄い小さい座布團を見て、値切つて四十五錢で買つた。そうして、老婆はそれを持つて歸つて、大崎へ六十錢で賣りつけた。大崎それでも嬉しかった。大崎は杖にしてゐた棒を細工して、義脚を造らへやうとしたが道具がないので、老婆は世話人の處へ鋸を借りに行つた。大崎はそれで、すぐ、義脚を造る仕事にとりかかつた。彼は座布團を椀のやうな形にして、それへ、切斷されて、のつぺら棒になつた右の大腿部をさし込むやうにし、丸太棒をほぼ脚の長さに切りとつたのを脚を包んだ座布團の外側から、しばりつけることにした。それ以上の工夫くふうも細工も、彼には出来なかつた。

併し、小屋の中でそれをつけて歩いてみようとする、廻つてゐた獨樂が最後に止まる時のやうに、ぐるつと中心を失つて、でんぐり返り、右脚の代りを勤める丸太棒が、によつきと突き出された。彼は起き上らうとすると、曲ることのない右脚の棒がつつばつて、容易に起き上れなかつた。やうやく起き上つたが、先づ突つ立つたまま不動態の姿勢をとることが、むつかしか

つた。それが、どうにか出来る、左脚に全身の重みと力とを乗せて、右脚の棒を少し前の方へ、ずらす事が出来た。自分では普通に一步を踏み出したと思つたのだが、實際には、二、三寸しか前へ出てゐなかつた。併し、その次には一層ひどい苦痛であつた。二、三寸前へ踏み出した右の義脚へ全身の重みと力とを托して、左脚を前へ運ぼうとした瞬間に、彼の腰力が挫けて、あつと云ふ間に、もんどり打つて倒れてしまつた。

「一本足つて、そんなに歩けんもんなあ。」

と老婆は、倒れたまま、片息をついてゐる大崎を眺めて言つた。

「なれるまで、杖をついてゐる方がいいべき。この上、怪我でもしたら、大ごとだもの。」

と老婆は慰め顔に言つた。大崎は、やうやく起き上つて、再びやつてみたが、右の義脚に力を托して、左脚を前へ運ぶ仕事、どうしても出来なかつた。その運動をするためには、この簡單極まる義脚では、どうもならぬのであつた。彼はその上、棒を杖にすることをやつてみた。そうして、一本の棒を右手に持つて、右の義脚を助けると、どうやら少し歩けることがわかつた。彼はこの稽古で汗びつしよりになり、くたびれ、右脚の疵痕が痛みを覺えたが、それよりも、氣持ちが急に明るくなつたのを感じた。

その夜、大崎は老婆に連れられて再び世話人の小屋へ行つた。そこで彼は焼酎を一升買はされた。そうして、部落の重立つた者に引き合はされた。それは男ばかりであつた。だが満足な人間らしいものは一人もゐなかつた。彼は此處でも、鐵道の除雪人夫に出てゐて、ラッセル機關車に

やられのだと言つた。この説明は、彼等に、一種の尊敬に似た感じを起させた。併し世話人はさすがに、「その不具の身體では力仕事は出来ないから、よほど眞面目に、うまく稼がないと、生きてはいけないぞ」と言つた。大崎は世話人の話を有難く、かしこまつて聽いてゐた。

併し、焼酎の酔ひがまはると、かしこまつてゐる大崎を傍にして、彼等の間に大騒ぎが起つた。それは、始めの間は大崎には何んの話やら全く見當がつかなくかつたが、次第に話の筋がわかつて來てみると、かう云ふことであつた。甲の重立者の小屋に一日、十錢で下宿してゐた加藤と云ふ肩拾で獨り者の老爺がこの間凍死したのだが、寄る邊のない者の死亡した時には、殆どいつものこと、部落の習慣として、本人の持ち物を賣り拂ひ、それで棺桶を作り、濟生會から診斷書を買つて火葬し、焼場の無常寺へ葬ることになつてゐるのだが、今度の加藤爺さんの場合は、何一つ金錢に代える持ち物がなくて葬式が出せぬと云ふ理由で、宿主の甲が部落の仲間から葬儀料の香典として五圓餘りを集めたはいが、朝暗いうちに加藤の死骸を背負つて濟生會へ行き、診斷書を買ひ、その足で市立病院へ行つて、死體を解剖用にと十圓で賣り拂つてしまつたのであつた。それで、甲は持物、死骸料、葬儀料の香典で、二十圓餘りをとつて毎日、焼酎を飲んでゐたのを、隣りの小屋に住んでゐる乙と丙とがこれを知り、甲を脅迫して二十錢宛の口留料を出させて一應は濟んだのだが、今夜、大崎の仲間入りの焼酎でこの事がふと、乙と丙との口から再び持ち出されて世話人の耳に入り、世話人は自分の立場から、火のついたやうに怒り出したのであつた。

「仲間の死體を病院へ賣り拂つた奴は、これまででも、何度かあつたか、仲間から葬式料まで擔き上げるなんて奴は、今度が始めてだぞ、太い奴だ。」

世話人はそう言つて怒鳴り立てると、いきなり甲へ飛びかかつて殴りつけた。甲も、おとなしく殴られてはゐなかつた。併し、結局、甲は自分一人だけでは、世話人始め、みんなの腕力には敵はなかつた。組み敷かれ殴りつけられ、蹴られたりして、とうとう彼は悲鳴をあげて、「悪かつた、許してけれ、助けてけれ」と叫んだ。

甲はやうやく起き上つて、詫を入れ、葬式料をみんな返へし、その外に、焼酎を三升出すことを誓つた。

大崎の仲間入りの酒盛りは、この騒ぎで終つた。

大崎は老婆と一緒に小屋へ戻ると、この夜の騒ぎそのものよりは、その原因について、身の毛のよだつ思ひに包まれた。死骸を賣ると云ふことが、不思議で、恐ろしかつた。それ以上に、死骸が金になる、十圓の金になると云ふことが、此の世を地獄そのもののやうに思はせ、思はず身ぶるひをした。

「おらだつて、このまま死ねば、誰かの手で賣られるにきまつてゐるさ。獨り身だから、あんなだつて、そうならんとも限らないさ。だから、二人で、いつまでも、かうして暮らしてゐれば、あんたは、おらの死んだ時、世話して呉れるべし、おらだつて、あんたの世話してやるさ。お互ひだから。なあと、死んだ時ばかりのことではなく、生きてゐるうちだつて、世話つこし合ふ

べよ。」

と言つて老婆はにたり笑つた。焼酎の酔ひに焼けただれるやうに火照つた二人は、老婆の薄い襦袢布圍の中で抱き合つて寝た。

朝が来た。窪地の部落の朝は曉の闇のうちから始まり、暗闇の中にならぬく彼等の姿は異様の蟲けらのやうであつた。大崎は老婆から、ぼて籠と、こまさらひを、三錢の借賃を前拂ひして借りうけ、老婆と連れ立つて、うす暗いうちに彼等の巢を出て街へ行つた。部落の仲間のうちにも、繩張り区域があるので、新米の大崎は、どこでも自由に芥箱を漁ることは許されなかつた。それで仕事になれ、定まつた繩張りの株を誰か仲間の者から分けて貰ふまでは、老婆の繩張りの中で働き、その稼ぎ高から三分の繩張り錢を出すことに約束したのであつた。老婆の歩みは遅かつたが、大崎の歩みは一層鈍く、老婆の手足纏ひになり勝ちであつた。その上に大崎の右手が、杖をつくためにふさがつてゐるので、左の手だけで芥箱の中を掻きさらつたり、ぼて籠を持つたりするのは、一層仕事を遅らせた。大崎は、へとへとに勞れ、老婆の後からやうやくついでに行くのが精一つばいであつた。それで結局、老婆が芥箱の中を溜り、拾ひとつたものを、大崎の背に負はせたバナナの古箱の中へ入れることにした。それでも仕事ははかどらなかつたが、大崎は身體が楽になるのであつた。

繩張り区域の、無数の芥箱を漁り歩いて、夕方近くに、とぼとぼと窪地の部落に戻つて来て、芥捨場同様の窪地で、拾ひものの片づけをしたが、望んでゐたほどの稼ぎがないので、老婆は不

機嫌であつた。ぶよぶよになつた大根の切り漬けと、西洋料理屋の芥箱で、ごつそりと捨てられてあつたライスカレーの残飯が、二人の空腹を充たしてくれた。

「その脚では、うまく働けないなあ、困つたもんでないか。こんなだば、おらの方で養つていかないばならなくなるなあ。」

と老婆は、さも厄介者を背負ひ込んだと言はんばかりに、あてつけて言つた。

「始めてだからまだ稼げないけど、少し歩くのがなれば、うんと稼いでみせる。これでも、元は他人には負けない稼ぎ手だつたんだから。」

と大崎は空元氣を出して言つた。

併し大崎にはバタヤ仕事は三日しか續けられなかつた。肩を拾ふ仕事どころか、遂には芥箱から芥箱へと、のそりのそり辿りつき、漁りあるいて、その場で自分の餓ゑを、捨てられた食べ残りや腐敗物で充たすだけで、精一つばいの仕事であつた。

老婆は彼の稼ぎの程度を見てあきらめたと思へ、彼に智慧を貸してやつた。白い金巾の上つぱりを着、法華宗の團扇太鼓を鳴らして、何處か賑やかな街角に座はつてみれば、少し寒い稼ぎだけれど、その代り、行き歸りの歩きだけで、あとは身體が楽だから、彼のやうな足の不自由なものには都合がいいし、また、不具だといふことで、通る人の恵みが多いから、と云ふわけであつた。併し、そういふ街角にも、それぞれみんな様々な仲間の繩張がきまつてゐるから、その座錢を出さなければならぬが、それは世話人と相談して話をつけてくれると言ふことであつた。それで結

局、大崎は座錢を拂つた上、世話人と老婆へ口利料を拂つて、或る街角に座を持つことになつた。老婆は白金巾を買つて来て、死人に着せるやうな白衣を縫つてくれた。勿論、大崎はそのためにも搾り取られた。彼は朝早くそれを着て、窪地の部落を出て行つた。それは、まるで死人が墓穴から、よろよると、さ迷ひ出たやうであつた。彼は時々止つて、そつと團扇太鼓を打ち鳴らし、昨夜老婆から習つた打ち方をやつてみた。何んだか、とてもよく調子が出るやうで、曉のすみ切つた冷い空氣に鳴り響くやうに思はれた。

大きい石橋を渡り、自分の坐るべき街角へ來た。或る銀行の建物の角で、その建物の基礎の敷石の上に、丁度一人だけ座を占めるのによい場所があつた。彼は、そこへ座ると、鉢の子代りに、汚いお笠帽子を、内側を上にして置き、教へられたやうに、二、三片の銅貨をその中へ入れて置いた。それから彼は、團扇太鼓を鳴らし始めた。併し暫くすると、その太鼓の音がまるで調子に乗らず、やたらにせき立てられるやうに、早くなるのに氣がついた。冷い雪がちらつく、凍つた街を、朝の仕事に急ぐ人々や馬やバスなどの音とは全くちぐはぐな、團扇太鼓の音が空しく鳴り立てるのであつた。

彼は始めは顔を上げずに、地上を無心に見つめ、昨夜習つたばかりの一夜漬けの調子など忘れて、ただやたらに、出たらめに、小刻みに打ち鳴らしてゐる間に、次第に周圍になれて来て、太鼓を鳴らしながら、時々、顔を上げて、街の様子を眺めるやうになつた。彼は、その街角の向ふの横町が、あの焼鳥屋の夜店の出でゐた横町であることに氣がついた。この發見は忽ちに近い過

去から遠い過去にわたつての一切の思ひ出を前後の區別なく、一度に生き生きと甦らせた。一切の過去は、何んといふすばらしさだつたらう。何んといふ楽しさだつたらう。肉親の誰れ彼れとの死別も生別も、彼自身の瀕死の刹那の苦痛も、どれも、これもが、今の彼よりは遙かに楽しいものに思はれるのであつた。そうして、この甘い思ひ出に一層の魅力を吹き込むために、彼の團扇太鼓が共鳴して来るやうに思はれるのであつた。

冬の一日は短かく夕暮はすでにやつて来た。冷えきつた臂を持ち上げる時が来た。鉢の子代りの古帽子の底には、一錢銀貨が三つしか殖えてゐなかつた。それは、老婆に前拂ひする日割の下宿代の一日分にも、ひどく不足するものであつた。彼は夕闇が下り、街の燈火がきらめく下で、財布へ錢を入れる時に、そつと在り金を調べてみた。財布の底には、あらひ、さらひ五十錢餘りしか残つてゐなかつた。彼は急に氣持が、ふらふらとした。彼は横町の一膳飯屋に入つて、持ち金を叩いて焼酎を一杯のみ、夢中で飯を食べた。小一時間程して、彼は、すつかり暮れた街へ出た。彼は、ただ、のろのろと、さ迷ひ歩いた。そうして老婆の小屋へは戻らず、狐狸に憑かれた者のやうに、雪の夜の中を彷徨しつづけてゐた。そうして、脚が自由になつて、思ふままに歩けるやうに感じた。然も、自分で自分がわからなかつた。彼は木の根のやうなものに、躓いて、轉んだ。彼は、併し、横になつたまま身體のとろけるやうな、何んとも言はれぬ、よい氣持ちで眠りに陥ち込んだ。一夜に一尺も二尺も降り積る雪が森々として降つて来た。

物音も風聲も絶えてしまつた。閑寂として聲がない。今や自然自身の、假借のない、露骨に冷

酷な聲だけが聞えて来るだけである。「おれは生んでも、生みの母胎でもない、死であり、墓である」と。

日と夜とのつづくうちに雪と氷とが曠野を覆ふてしまつた。そうして自然は冬の季節の、しつかつとした歩みを、嚴格に誤りなく押し通した。その地方の人々は、逢ふ毎に、ひどい凍れる冬だと言ひ合ひ、また凍れがかうひどいと來年の作こそは豊作だらうと、お互ひに慰め合つた。農家がよくなれば、町にも景氣が出て来るに違ひないと、空元氣を出し合ふのであつた。併し本當にそうであつたらうか。その月日が過ぎ去つてみれば、それらの豫期も希望も何一つ當らなかつたばかりか、凡ては空頼みに過ぎなかつた。ひどい凍れで凍死する者もあり、不作と不景氣とは山野田畑といはず、村落、都會といはず、至る處に荒れ狂ふやうに荒れまわつたのであつた。然も、自然は平然として、嚴格に、一步の誤りもないかのやうに、その運行をつづけてゐたのであつた。風雨、氷雪、吹雪、嚴寒、そうしてその後、徐々^{じゆじゆ}に春が曠野に訪れて来た。泥炭地の曠野は、再び春の出水にひたり、到る處、鐵氣水が、錆色や赤紫色をして、じくじくと溜りを作り、沼の水は鉛色に濃んでゐた。

かういふ曠野の上に在る大崎の行倒れの死體は、今や遺棄された生なき有機體の動物質の一塊に過ぎない。氷雪に凍り固められた死體が、次第に地熱と春の陽光とに温められた春の水にふく

れ上り、腐敗と分解作用がやつて来た。酷寒から甦らうとしつつある原野の泥炭地の上に、彼は、元素に分解し、彼を創り成した土に歸りつつあつた。彼は、かつて「何んと言ふものだ！」と巡査から驚きあやまれたことがあつたが、今こそその「何んと言ふもの」かわからぬものに歸り化しつつあつた。もし二、三年の間、何んにも発見されずにあたならば、腐敗と分解作用にうちまかされ、原野の餓えたる鳥や野鼠に啄ばまれ、風雪にさらされて、眞實に土壤に化し終つたであらう。そうして許可移民の一人としては完全に失敗して、上に喰はれて了つたのではあるが、ただ僅かに廢殘の五體を土にゆだねて、あの泥炭地の曠野の土の一塊を肥やすに役立つたことで満足すべきであつたらう。畏るべき死の土は、かかる無数の犠牲をその胎中に埋め葬つて、やがては不毛でなくなり、或ひは豊饒とすらなるのであらう。併し遂に死は死であり、犠牲は犠牲である。自然にとつては大崎の死も、やがては自然を肥やす一要素となるかも知れぬが、けれども大崎にとつては、自然はこれを開墾する彼に恩恵と報酬の一片をすら與へず、絶えざる困窮と死滅を與へたに過ぎなかつた。然も自然は自己の爲す處に悠々と微塵の喜怒哀樂をも表はそうとはしない。實に畏るべき嚴然さでその運行をつづけてゐた。

その年も凶作と饑饉は、曠野を覆ふ氷雪のやうに、北海道の農村全部を襲ふたのであつた。大崎が見捨てて夜逃げした虹別原野も、彼の夢を賭けた新しい舌辛原野も、その例外とはならなかつた。死亡、離農、逃亡は相次いで起り、救援を喚ぎ求める開墾地や農村の危急に對して、當局も政治家も無力を曝露した。行く處まで行き、落ちる處まで落ちてしまはねば致し方のない事態

であつた。諦めの他に救ひは望まれぬ事態であつた。併し今や、氷雪の下に凍結して横たはつてゐる大崎には、凡てが済んだことであつた。これは勿論、事態の眞の解決ではない。だが、大崎には、彼の方法によつて彼自身の事態が解決されたのであつた。彼は力つきて倒れた一人の農夫として、土に喰ひ殺され終つた自分の一生を、それは非常に難澁で困窮した一生であつたとは思つても、不幸な一生であつたとは思つてみる暇もなかつたのではないか。彼は、靜かに曠野の氷雪の下に横たはつて、春の甦り來ると共に腐敗し、解體し、土に還らねばならぬ死骸に過ぎないのであつた。

五月頃のことであつた。釧路原野の視察に來遊してゐた、或る博物學者が釧路から北方へ向つて此の原野を實地踏査してみようとして濕原を通りかかつた折、思ひがけぬ蘆原にひどく糜爛した一個の變死體の横たはつてゐるのを発見し、驚いて釧路へ戻つて警察署へ報じた。警察署からは刑事係巡査と警察醫と人夫とが派遣されることになり、発見者の博物學者を現場へ案内役にして濕原へと入つて行つた。死體は解體の後で野鼠や鳥に喰ひ荒らされて、二目と見られぬほど悲惨を極めてゐた。さすがの警察醫も手のつけやうがなかつた。死體の特徴といふものも、次のただ一つの點を除いては何一つとして、數へ上げることが出來ぬほどであつた。そのただ一つの特徴といふのは、右脚が大腿部邊りから無く、丸太棒に小さい座布團を當てて作つた不恰好な手造りの義脚が、檻穽の中から、によきつと突つばつて飛び出てゐるだけであつた。檢死も頗る簡単に済まされた。誰しも、手のつけやうがなかつたのであつた。

「乞食の行き倒れです。」

と警察警が無造作に言った。巡査にも、異論はなかつた。

「それに違ひありません。」

「でもこの乞食は、びつこの癖に、よくこんな所までやつて来たもんですね。」

と警察警は、煙草をすひながら何んの氣なしに言った。ところが、その不用意なひと言が刑事、巡査の耳には、ふと聞きとどめられた。

「去年の冬頃に仲間の者にやられて、この原野へ捨てられたのではないか。こんなびつこで、此處まで歩いて来るのは、並大抵のことではないし、また乞食が何んのために、こんな原野へやつて来たか、わけのわからぬことだ。」

と巡査は胸の底で、そう思つた。巡査は、そう思ふと、急に態度が變り、ひどい臭氣が鼻をつき、蛆蟲の群りたかつてゐる屍體の襤褸着物を、あちら、こちら探つて所持品、特に財布を見出そうとした。併し、そんなものは何一つとして見當らなかつた。そうなると、巡査には一層疑惑が深く強くなつて来た。

「仲間の者が在り金を全部奪つて死體を此處へ持ち運んで捨てて行つたのだ。」

巡査はそう考へながら、近くの水溜りへ行つて、手をごしごし洗つた。

「併し殺したのなら、穴を掘つて埋めてしまひそうなものだが」と巡査は皆の方へ歩きながらまた考へた。「いや、こんな廣い原野で誰も人なんか來ないから見つかることはないと思つた

んだらう。去年の秋遅くか、冬間近かのことだらうから、その中に雪の下になつて隠されて了ふと思つたのに違ひない。よし、あのサムライ部落を洗つてやるぞ。」

巡査は思ひがけない手柄が既に自分の掌の中に握られてゐるやうに感じた。併し傍で腕組みをして、黙つて突つ立つて見てゐる人夫は、いづれにしろ、やがては自分が手をかけなければならぬ此の場の始末に漚面つくつてゐた。

「あんなに腐つてしまつた乞食の死體なんて、持つて歸へつたつて、どうなるもんか。ここさ埋めて了へばいいのに。物好きにこんなものを見つけるなんて、人騒ぎをさせて始末に負へないこつた。」

と彼は心の中でつぶやいてゐた。

屍體は檢死が済んでも、引取人がない上に、現場が濕原地帯ではあるが、釧路市に屬してゐる場所なので、釧路の警察署へ持ち運ばねばならないのであつた。併し、その運搬の方法について困つた。巡査は人夫をつれて、かなり遠くの農家へ行つて荒藁と荒繩を出させ、其處から又かなり隔てた獵師の家を訪ねて丸木舟を出來るだけ現物に近い、川岸へ廻させた。そうして屍體を荒藁の上に移し、糞子巻きにし、荒繩をかけて丸木舟の舳の方へ乗せ、みんな一緒に釧路川を下ることにした。

「こんな、人間の用のない原野によく行き倒れ者があるが、どうして、こんな處へ迷ひこんで死ぬのか、おらには、ちつともわからん。餘程、何か、いいものがこの原野にあると思ふの

かしらん。變なことだ。」

事情を巡査から聞かされた獵師は屍體の始末から、丸木舟へ乗せるまで、人夫の手傳ひをしなから、そう言つた。屍體を舳に乗せ、皆を舟の胴の處へ乗り込ませると、獵師は舟を少し押し出すと共に舳の方に飛び乗り棹をとつた。そうして舳に立つた獵師の手なれた棹で、丸木舟は悠々として濁流の上をすべるやうに流れ下つた。

五月の青空が澄み徹るやうに晴れ渡り、北方遠くまだ雪をかぶつて眞白に輝く鋭い阿寒岳の頂が、青空の涯に、くつきりと眺められた。

「やあ、鶴が飛んで来た。」

と警察醫が叫んだ。皆是指された方を仰いだ。悠々として二羽の鶴が西の方へと飛んでゐた。皆はその美しく、崇高な飛翔の姿に見とれ、青空の中に遠く消え去るのを見送つた。

「鶴と言ふ鳥はとても養生家で、いつも腹八分目しか喰べないそうですね。だから腹を開けて見ると、いつも腹八分目しか入つてゐないそうですよ。」

と警察醫が何を考へたか、突然言つた。巡査は感心したやうに肯いた。

「だから、鶴は千年といつて、なが生きをするんだそうですよ。」

と警察醫が言つた。

「この頃では、この邊の丹頂鶴も人氣者になつて、東京からわざわざ見物に出かけて来る人が多くなりましたね。丹頂鶴が一年中、棲んでゐる土地は、日本中で此處だけだそうです。内地に

ゐる丹頂鶴なんかは、季節毎に渡つて来るんだぞ。で、その土地に棲みついて蕃殖するのは此處だけだそうですね。」

と巡査が自慢氣に言つて、ちらと博物學者の顔を見た。

「北海道出身の有名な油繪畫きが東京からやつて来て、此處の丹頂鶴の繪を金屏風に畫いて、總理大臣へ贈るんだつてことですね。丹頂鶴もそうになると、いろいろ名譽なもんですね。」

と警察醫が言つた。

「でも、おかしいですね。畫家が鶴の繪を畫くのはいいけれど、それを、何も、油繪で金屏風に畫いて、總理大臣に贈るなんてことは悪趣味ですね。」

と無口の博物學者が靜かに、つぶやくやうに言つた。併し、その言葉の意味は、警察醫にも、巡査にも通じぬ様子であつた。老年に近い博物學者は、いつも傍觀者であらうとするやうに、自分から進んで口をきらうとはしなかつた。

「舌辛村のその邊の百姓たちも、丹頂鶴が自慢で、その棲息地だけを分村して、鶴居村とか、鶴舞村とかいふ村に獨立するんだつて騒いでゐますよ。尤も、舌辛村つていふ名は貧乏くさくて、不景氣な名前ですからなあ。」

と巡査が言つた。

「本當に、聞いただけでも、鹽つばくなるやうな名前ですね。」

と言つて、警察醫は大聲で笑つた。この話に、博物學者は思はず獨りで苦笑ひを漏した。それ

は、村名の改正がおかしいのではなく、丹頂鶴の棲息地を村自慢にし、その地域を分村して、その土地に彼等の生活を立てようとする百姓たちの考へそのものに對する他人事ならぬ危惧の念からであつた。

「危い、危い。君たちの生活、土地との連りは、丹頂鶴のそれと全く別物なのだ。君たちは丹頂鶴と一緒に同じ土地に棲むことは出来ないのだ。又、棲んではならぬのだ。君たちの生活の繁榮のためには、丹頂鶴が此の土地から死滅してもいいのだ。僕は博物學者だが、君たちの生活がこの土地に根深く築かれてゆくためには、丹頂鶴の死滅をも惜しむものではない。」

と博物學者は胸中深く考へてゐた。そうして彼は、かような過程で、人間の繁殖のために既に滅亡して行つた多數の動植物界の犠牲を、ぼつりぼつり思ひ出してゐた。

「この間、面白いことがあつたんですよ。中雪裡ナカユキの原野で、丹頂鶴の大きい奴が、狐をとる虎挟みにかかつたそうですが、禁獵になつてゐるので放してやつたが、程なくひとりで落ちて死んでしまつたそうです。それを、釧路署へ届けたもんがあるんですが、道廳、釧路市、郷土博物館、刑務所、地方裁判所、中學校、女學校、小學校なぞから、貰ひ受けの競争になりました。警察では處置に困つて、郷土博物館に保管を頼むことにした處が、突然、長官から、署長へその剝製の送付方を命令して來ました。その理由が、素敵です。阿寒の丹頂鶴は既に天然記念物に指定されたもので、従つて管理者は内務省であるから、管理者の所有で、當然、國の所有に歸屬すべきものであるといふのです。そういうわけで、その丹頂鶴の剝製は道廳へ持つて行かれ、あの猪

首の太い長官の部屋の片隅に置かれてあるつてことですよ。」

と巡查が何かを諷刺して氣持のよさそうな顔をして語つた。

「それは面白いですね。すると、今に道廳の長官室は丹頂鶴の博物館になりますよ。この邊の丹頂鶴はだんだん死んで行くのが多いそうですから、首の短い長官が、頸の長い丹頂鶴の剝製にずらりと取りまかれてゐるのなんか、面白いですね。」

と警察醫が笑つた。

「鶴も生活難で此頃では、餌がなくて餓死にするのが多いんだそうです。それといふのも、天然記念物に指定されて、棲息地一帯が禁獲區域にされたので、鴨や鵜ウなぞに餌を奪はれるのと、雪や氷で原野や川が凍るので餌がとれなくなるために、だんだん餓死にして行くのだそうです。」

と巡查が言つた。

「道廳では、大いに保護するとか、してゐるとか言つてゐるやうですが、そう餓死にするよ

うでは、もつと保護しなければならぬのでせうか。」

と警察醫は言つた。
「それあ、保護してゐますよ。百姓だつてあれまでは保護されてゐませんね。何しろ三千町歩の大平野を、開拓計畫から除外して、永久に原始のままの濕原地帯に保存して丹頂鶴の樂園にしてやらうといふのですから。われわれも、そんな保護をして貰ひたいものです。」

と皮肉そうに、うす笑ひをして、巡査は言葉をつづけた。

「それについては、とても面白い、経緯があるそうですよ。一體、丹頂鶴の棲息地に、幾羽位棲んでゐるのかと云ふと、せいぜいで三十羽位なもので、然も年々減る一方らしいのです。それで道廳では非常に心配して眞剣に對策を考へたのですが、此頃では農林省までも、ひどく力癪を入れて保護蕃殖させやうとしてゐるのです。ところが肝心の道廳で意見が一致しないのです。拓殖部では、この地域の大部分が國有未開地ですから、この釧路川の切替工事の完成した後には、農耕又は牧畜地として利用出来る土地になり、大體、少くとも千戸以上の農家を入地させ得る豫定なのです。そういふ大地積の殖民地を、僅か三十羽位の經濟的價値のない、然も、年々減つてゆく丹頂鶴を保護するために犠牲に供するのは、拓殖上甚だ遺憾だといふのです。この反對のために、天然記念物の指定がごたついて遅れてゐたのだそうです。ところが面白いことが起りました、この反對意見の代表者だつた拓殖課長が、今度は社寺兵事課長となつて、自分でこの解決をつけなければならぬ立場になつたのだそうです。皮肉ぢありませんか。それで、今度は、新しい拓殖部長も承認して、三千町歩くの土地を保護禁獵地域に指定することに讓歩したので、學務部長が正式に天然記念物として指定方を申請して、文部省がこれを指定したのでそうです。」

と巡査は得意氣に上層官廳の首腦部の内幕を曝露する卑劣な快感と平常の鬱憤を話のうちに漏らした。

この時、それまで靜かに煙草をふかしながら、黙つて聞いてゐた老博物學者が、二人の卑俗な

話を、これ以上黙つて聞いてゐられない様子で、併し言葉の調子を亂さず、物靜かに言つた。

「併しそうして保護しても、現在の三十羽の鶴がどしどし殖えるものではありませんね。假りに保護のために生存條件が、どんなに恵まれても、鶴の生態から考へると、殖えることが困難なのです。鶴は卵を二つ産みますが、一方が雄、一方が雌で、その内、一方が孵ると、他方は孵らぬといふことです。そうして孵つて生き残つたものが、他の生き残つたものと、番になるのだと考へられてゐます、これでは、蕃殖どころではないわけです。寧ろ死滅して行くのが、自然の法則のやうなものでせう。三十年來、減る一方で、どうしても殖えないわけではせう。」

「でも、そんな蕃殖力の弱いものが、今頃まで、よくこんな處に棲息して生き残つたものですね。」

警察官は急に興味をひかれたやうに言つた。

「それには、生存を護るための條件が、今まで維持されてゐたからでせう。未開の泥炭地で、濫りに人間が近づけなかつたことが一番の條件であつたでせう。併し近頃では、生存の條件が、鶴にとつてまるで異つて來たのです。丹頂鶴も、人間にひどく、おびやかされることになつて、自然によつて恵まれた條件の權利が剝奪されて來たのです。人間は、鶴の生存を根本からおびやかしながら、又それだからこそ、色々な保護を興へることになるのです。そうしてその保護が又、色々な反作用を起して、彼等の生存をおびやかすやうになつて來ます。丹頂鶴の保護のために禁獵區とすれば、他の野鳥が非常な蕃殖力を以つて殖えて來て、丹頂鶴の餌を奪ひとり、丹頂

鶴の生存が、おびやかされますが、この野鳥の類に對して狩獵を解禁すれば、人間の鐵砲は、むしろ丹頂鶴を覗ふことになるでせう。美しい鳥ではあるが、もうこの土地では棲息が許されぬ時が来たのです。でも、大きな目から見れば、それが自然の法則なのでせう。」

博物學者は物靜かに、淡々とした、こだわりのない態度で言つた。

巡査と警部とは、今まで無口であつた相手が話をし出すと、「生存の條件」だとか、「自然の法則」だとか、むつかしい言葉を平氣で、無造作に、然も普通の言葉と同じやうに使ふのに恐れをなした様子で、黙つてしまつた。博物學者も、それつきり話をやめた。併しこの老博物學者は、あの美しい鳥をめぐつて、醜惡、卑劣で、且つ滑稽極まる多くの人間の様々な考へや動きを想像しながら、悠々と煙草を吸ふてゐた。

丸木船は、かういふ話と人々を乗せて釧路川の濁流を流れ下つてゐた。丸木舟の舳の方に置かれた荒庭で簀の子巻きにされ、曠野の枯蘆で覆れた屍體は、恰かも枯草を積まれてゐるやうに見えた。その屍體は、どう考へても大崎常造の變り果てた骸のやうに思はれるのであつた。もしこの老博物學者が、この屍體の、生きてゐた間の生活史を知つたなら、彼は何んと言ふたであらうか。

處女地奥附 出文 一〇一六九

昭和十七年十二月十四日 印刷

昭和十七年十二月十九日 發行

郵定價金三圓五十錢 函二二錢

著者 早川三代治

小橋市 藤町二ノ三

發行者 長澤小輔

東京市四谷區左門町四

印刷所及印刷者 守田印刷株式會社

守田銀造

配給元 日本出版配給株式會社

東京市牛込區早稲田橋町四〇五

東京市四谷區左門町四

發行所 元元書房

電話 四谷二四八二番
東京市四谷區六〇九〇番

協會員番一〇九〇八八



最新刊 (九月廿日發賣)

杉森孝次郎著

世界新秩序建設の書

歴史哲學の一斷層

B6判三四〇頁
上製本サック入
定價二、三〇錢
送料一、五錢

わが思想界に於て獨自の地位を占め、且つ日本評論家協會の會長たる杉森教授は大東亞戰勃發直前より今日に到る日本の世界的立場を究明して、光を將來になげ、一の歴史哲學的論考をこの書に依つて發表された。現大戰の意味と目的とを鮮明にした本書は勿論、わが知識人が必讀すべき書たることは言ふ迄もない。

主要目次

1. 世界の理想主義を動員せよ
 2. 新東亞建設の環境
 3. 見透しと理想
 4. 世界を指導すべき世界觀
 5. 大東亞建設に徹底せよ
 6. 世界史轉回への巨歩
 7. 民族の天才性への自覺
-
8. 新宗教來?
 9. 眞價實力主義による適材適所主義の普遍的斷行に進め
 10. 世界のために世界の公敵を討つ (その趣旨の世界的徹底の必要)
 11. 米英國民に與ふ

東京市四谷區 元元書房 電話 三六四二番 東京市四谷區 元元書房 電話 三六四二番

953
305

終



裝幀 吉岡 憲